



司法省
總務局
文書課

235

B
F
2

獨逸訴訟法釋義

第七

小松濟治譯

文書課

庫	文	省	法	司
				和
				書
				門
			政	
			治	
			及	
			法	
			律	
			部	
			號	
			三	
			六	
			四	
			五	
			十	
			二	
			架	
			函	
			共	
			一	
			冊	

第百八十一條

〔代言人ヨリ代言人ニ為ス送

達ニ関スルノ條

原被告代言人ヲシテ代理セシメアル時送達ハ
代言人ヨリ代言人ニ為スヲ得

送達ヲ証明スル為メニハ之ヲ受取タル代言人
ノ年月日及ヒ署名ヲ具備セル受領書ヲ以テ足
レリトス

第一解理由ノ説明

此規則ノ代言人訴訟〔下ノ

第二解參着

ニ於テ為ス送達ハ裁判所執行吏

ニ由ラスシテ代言人ヨリ代言人ニ為サント

欲セハ即チ之ヲ為シ得ルノ便宜ナルヲ付

テハ既ニ説述スル所アリタリ〔本法第百五十

二條第二解參看蓋此規則タルヤゲンフ府訴訟法ハノールフル国会全上〔第百三十三條〕バイルン国会全上〔第百九條〕バゲン国会全上〔第百三十一條〕李漏生国草按〔第百七十四條〕ヘンセニ国草按〔第百五十一條〕李漏生国草按〔第百七十四條〕第百七十五條〕北部獨乙聯邦草按〔第百六十三條〕ニハ之ヲ規定シアラサレ氏法朗西訴訟法ニハ之ヲ明示セル所トス然リ而テ其之ヲ直ニ為スニハ必ス代官人間互ニ之ヲ承諾スルヲ要シ且受取人ノ書面上ノ受領証ヲ得テ送達ヲ証明スル為メ提出セサルヘカヲナルナリ又若シ代官人間ニテ之ヲ承

諾セサル中ハ即チ裁判所執行吏送達方法ニ依テサルヘカラス

〔第二解制定ノ沿革〕〔本書凡例參看〕各草按皆同

一ナリ而テ本條ハ原按ニ於テ單ニ本法第七十四條第一項ニ於ケル代官人訴訟ノニニ限リアリタルヲ国議院委員會ニ於テ更ニ凡訴訟ニシテ原被告両造共ニ代官人代理シアル各場合ニ擴張セシムルノ修正ヲ為シタリ蓋此修正ハ適切ニシテ且便宜ナリト云フヘシ

〔第三解受領証〕 実ハ理由説明ニ云フ如ク受領

証ノ交付ハ任意ノモノニハ非ラサルナリ必スヤ回来ノ慣行及ヒ代官人タル位置ノ自ラ

影響ヲ興ル所アルヘキナリ然リ而テ送達癸
付人又ハ受取人ニ於テ重キ過失ニ因リ費用
多キ執行吏送達方法ヲ為サシメタルハ本
法第九十七條ニ準シ其為メニ生シタル増加
費用ヲ負担セサルヘカラス
又一人ノ訴訟人ノ数名ノ代言人中ノ一人又
ハ数名ノ訴訟人ノ代言人ニ一通ノ書面ヲ送
達スレハ即チ足レル趣義ナレハ本法第九十七
十二條ハ本條ノ場合ニモ適用スヘキナリ〔本
法第九十七條乃至第九十九條ノ第三解
参照〕
本法第六十六條乃至第六十七條ノ意義

ヲ以テ補備送達ヲ為スルハ本條ニ許サレ
所ニシテ單ニ代言人自ラ出シタル受領証ノ
其効カヲ有ス然レモ法律上許シアル補備
受領人ハ其代言人ヲ代理スルノ能力アルヤ
言フ俟タス
而テ準備書面ニ對スル受領証ノ文章ハ短簡
ニシテ乃チ對手人ニ返付スヘキ原書ニ左ノ
如ク証明スヘシ曰
予ハ本日之ト同文ナル証明シアル謄本ヲ
受領セリ

年月日

記名

又此場合ニ於テ郵便ヲ以テ送付スルモ妨ケ

サ
ル
ナ
リ
然
ル
中
ハ
其
原
書
ニ
証
明
シ
テ
返
却
セ
ン
コ
ト
ヲ
要
ム
ヘ
シ
必
竟
此
郵
便
ニ
頼
ル
ハ
実
ニ
一
方
ヲ
信
用
ス
ル
ノ
最
モ
篤
キ
時
ノ
方
法
ト
云
フ
ヘ
キ
ナ
リ

第百八十二條

〔送達ニ関スルノ〕

〔外国ニ為ス送達ニ関スルノ〕
外邦ニ為ス可キ送達ハ其邦ノ相當官廳又ハ其邦ニ駐紮スル帝國ノ領事若クハ公使ニ依頼シテ之ヲ為スモノトス

第百八十三條

〔治外法権ヲ享有スル者ニ送〕

〔達スルノ〕

治外法権ヲ享有スル獨乙人ニ為スヘキ送達ハ其人帝國ノ理事員ニ屬スル時ハ帝國首相ニ依頼シ若シ聯邦ノ理事員ニ屬スル時ハ其聯邦ノ外務宰相ニ依頼シテ之ヲ為ス
帝國領事館ノ首長ニ為スヘキ送達ハ帝國首相ニ依頼シテ之ヲ為スモノトス

第百八十四條

〔送達ニ関スルノ〕

〔外邦其他ニ在ル軍人ニ為ス〕
外國ニ駐屯シ若クハ戒嚴中ノ軍隊又ハ艦装シタル戦艦ノ補充ニ屬スル者ニ為スヘキ送達ハ

長上ノ司令官ニ依頼シテ之ヲ為スコトヲ得

第百八十五條 第百八十二條乃至第百八十

四條ニ繼續スル條

必要ナル依頼書ハ受訴裁判所々長之ヲ作ルモ
ノトス

送達ハ之ヲ為シタルヲ依頼ヲ受タル官廳若
クハ官吏ヨリ書面ヲ以テ回報ス

第一解理由ノ説明(本法第百五十二條第一解參
考) 孝漏生国章按(第百七十七條以下第四百
十一條)及ヒ北部獨乙聯邦章按(第百六十五
條以下)ニ於テモ外國ニ於テ又ハ外國ニ為ス

送達ニ関スル規則ヲ定メアリテ即チ本人自

行ノ原則ヲ応用スルノ趣義ナリ此規則ノ趣

義ニ依レハ送達ハ訴訟人ノ選フ所ニ任セ裁

判官ヲシテ外國官廳ニ依頼セシムル乎(殊ニ

孝漏生国章按第百七十八條第百四十一條以

下ニ於テハ訴訟人ノ送付情願昏ヲ併セテ送

付セサルヘカウサルナリ)或ハ外國ノ公証人

若クハ送達吏又ハ郵便ニ頼テ之ヲ為サハル

可ラサルナリ加之其之ヲ果行シタル証明ト

シテ精密ナル規則ヲ要トスルモノ数多ナリ

然ルニ本法ハ必竟原被告ノ為メ利便ナルハ

裁判所職務上ノ処理ニ付スルヲ以テ切要ト

スルニ在ルカ如ク能ク獨乙国ノ法律上ノ觀
察及ク法律上ノ習行ニ適當シアリテ而カモ
之ヲ主義ト為ス所ニ於テ敢テ毀損シ得サル
ノミナラスハノール州ニ於テハ同国訴訟
法第百二十四条第百二十六条ノ嚴格ナル規
則ノ存スルニモ拘ハラズ已ニ千八百五十二
年以來實際ニ良効績ヲ奏呈シアル所トス
抑本法ハ民事訴訟ニ檢察官ノ立會ヲ要セサ
ルカ故ニ已ニ法朗西訴訟法第六十九条ハノ
一ナル国全上第百二十四条乃至第百二十
六条バイルン国同上第百九十三条(六)ハノ一
ナル国同草按第百七十条ニ於テハ檢察官ハ

其依頼ニ參典シテ送達ヲ果行ス(本法第百十
九條第一解參看)此第百八十二条乃至第百八
十五条ノ規則ニ依リ外邦即チ獨乙国ニ住居
セス且寄寓セサル者候ニ治外法權享有者ニ
為スヘキ送達ハ裁判所書記ニ於テ依頼スル
官司ニ發送スル所ノ裁判所々長又ハ治安裁
判官ノ依頼書ヲ以テ之ヲ為スノ趣義トス此
如ク簡短ナル規則ナルヲ以テ渾ヘテ繁雜ナ
ル成規ハ之ヲ要ト為サ、ルナリ
裁判所ハ之ヲ依頼スルニ相当スル官司ヲ訴
訟人ニ比スレハ更ニ能ク知悉シ且知得スル
ニ至リ易ク又其送達ヲ確實ニ且適當ノ場所

ニ為シ得ルコトハ固トヨリ歴然ナルヘシ而テ
違ヒ此依拠ヲ拒絶セラレ或ハ其場所ヲ確示
シ難キカ如キ稀有ノ場合アルニ方テハ乃チ
訴訟人及ヒ裁判所ハ到底公然ノ送達ヲ為ス
ヲ要スルト否トヲ決定スキノミ〔次第百八十
六条第二項参看〕
如何シノ場合ニシテ外国ニ送達ヲ為シ得サ
ル乎ハ本法第七百四十条第七百四十三条第
七百六十一条ニ於テ之ヲ規定ス

〔第二解制定ノ沿革〕 北部獨乙聯邦草案ニ関シ
テハ宜ク上ノ第一解及ヒ下ノ第六解ヲ参看
スヘシ其他ノ各草案ハ皆同文ナリ而テ国議

院委員會ニ於テ異議ナク認可シタリ而テ其
起稿委員ハ此第百八十四条ニ付テ長上ナル
トアリシヲ長上ノニ修正シタリ蓋長上ノト
云フハ明瞭ヲ欠クニ似レ他ノ第百八十二
条第百八十三條ノ行文ト其体裁ヲ同フスル
ノミナラス全体ノ意義ニ於テ上長司令官カ
依頼セラル、了〔第百八十五条〕ハ自ラ明瞭ナ
ルヘシ

〔第三解裁判所職務上ニ為ス處分〕 本文第百八
十二条乃至第百八十五条ノ行文ニ依レハ受
訴裁判所ハ恒ニ職權ヲ以テ之ヲ為スモノト
断定シ得ヘキカ如クナリト雖モ然カモ本法

第二百八十八條第一項ニ依リ且準備書面交
換ノ制〔本法第百二十條以下〕ニ因レハ即チ然
ラサルヲ知ルヘシ殊ニ此第二節〔本法第百五
十二條註解參着〕ニ對スル一般ノ理由説明ニ
於テモ已ニ其疑ニキ送達ハ原告ノ申立ヲ
誤ツヘク但第百九十四條ニ依リ職務上ニ
係ル送達ノ例外ハ此限ニ在ラサル旨ニ付テ
説述シアルナリ此他ノ例外ニ付テハ本法第
五百八十二條第百六十二條第百六十三條第百
六十九條〔本法第百五十三條乃至第百五十六條
ノ第六條參着〕ニ於テ規定スル所アリ又本法
第百五十二條及ヒ第百五十四條ニ於ケル裁

判所書記ノ紹介ハ更ニ本文ノ如キ送達ニ関
スル所ニ非ラズ然レハ治安裁判所ノ事件ニ
付テノ申立ハ書記ニ就テ口述シ其調書ニ記
載セシメ得ルナリ〔本法第百六十二條參着〕
蓋原告ノ請願ハ必ズ到底公然ノ送達ヲ為
スヘキヲ豫メ包含シアル所ト知ルヘシ

〔本法第百九十四條第五條參着〕

〔第四條外邦〕外邦即チ独乙国外ノ趣義ナリ〔本

法第十三條第七條及ヒ裁判所編制法第百六
十一條第百六十二條參着〕

本文第百八十二條及ヒ第百八十三條ニ於テ
ハ送達發付人ニ於テ直接ニ送達ヲ為スノ權

利アラサル丁ハ明瞭ナレモ第百八十四条ニ
ハ得ノ字ヲ用ヘテ之ニ異ナル所ヲ示セリ上
ノ第一解参着

帝国領事ニ関シテハ帝国法律ニ採用セラレ
タル千八百六十七年十一月八日ノ法律第十九
条ヲ参着スヘシ千八百六十七年北部独乙聯
邦官報第三十八丁参着

第五解治外法權享有 独乙人ノ治外法權者ニ
付テハ其独乙内国ニ居住スルト外邦ニ居住
スルトニ論タク本文第百八十三条ニ從フヘ
キナリ本法第十六条第一解参着又之ニ属ス
ルノ何人ナル乎ニ付テハ本法第十六条ノ第

一解第五解ヲ参着スヘシ而テ独乙国内ニ居
住スル治外法權ヲ享有スル外国人ニ付テハ
固トヨリ此第百八十三条独乙人ト明示シテ
レハノ關係シラス乃チ独乙ノ裁判權ニ服
從セサル以上ハ裁判所編制法第十八条第十
九条参着之ニ送達スルニ付テノ規則ヲ要セ
サルハ当然ナリト至テ復々裁判所編制法及
シ本法第二十五条ニ依リ此外国人ハ尚ホ物
ニ関スル裁判管轄ヲ独乙内国ニ有シ且特別
ノ規則ナキ限リハ其送達ニ付キ本法第百五
十二条以下ノ通常規則ニ從フナリ然レモ是
レ此第百八十三条其他ノ宣令ノ主義ニ相違

合セサル所ト云フヘシ
又此第百八十三條第二項ニ於テ特更ニ領事
ヲ指示シタルハ必竟其之ニ屬スル者ハ悉ク
治外法權ヲ享受スルニ非ラサルヲ以テノ故
ナリ〔本法第十六條第六解參看〕
此第百八十三條ニ関シテハ尚ホ上ノ第三解
第四解ヲ參看ス可シ

〔第六解軍人〕 此第百八十四條ニ付キ理由説明
ニ説述シテ曰北部獨乙聯邦草案第二百七十
一條ノ規則ニ依レハ本法第百七十七條ノ場
合ニ於テハ其軍法裁判官〔審〕ニ依託セサルヘ
カラサルナリ然ルニ本法ニ於テ上長司令官

ヲ以テ軍法裁判官ニ換ヘタルハ即チ戦艦ニ
對スル規則ト為セハ必ス之ニ依リ能ハサル
場合アルカ為ノノ何ントナレハ軍法裁判
官ハ大ナル艦隊ニハ定置シアルモ各戦艦ニ
ハ之ヲ置カサルヲ以テナリ云々

外国ニ駐屯スル軍隊ト云々戒嚴中ノ軍隊ト
云々及々艦装シタル戦艦ト云フニ付テハ本
法第十四條第十五條ノ第一解第二解第三解
第五解ニ説ク所ヲ看ルヘシ

又此第百八十四條ハ本法第百五十八條ノ如
ク卒及々下士ニ限ルニ非ラサルナリ故ニ士
官及々同等ノ軍吏ヲモ包含スルノ趣義トス

乃チ此第百八十四條ノ上長司令官ハ本法第
百五十八條ニ於ケルト其意義ヲ異ニスルナ
リ
抑此第百八十四條ハ只ニ之ヲ為シ得ルノ趣
義ニ過キス〔上ノ第百四解參看〕故ニ本法第百五
十二條以下ノ方法ニ依リ送達ヲ為スハ原被
告ノ任意ナリトス

〔第七解請願書〕 此第百八十五條第一項ニ云フ
所ノ所長トハ治安裁判所ニ在テハ該當スル
治安裁判官ノ義ナリ〔上ノ第一解及ニ裁判所
編制法第二十二條第二項參看〕
又此第百八十五條第二項ノ理由説明ニ曰送

達ヲ依頼シタル官司又ハ官吏ヨリノ書面上
之ヲ果行シタルヲ証スルモノハ恰モ裁判
所執行吏ノ本法第百六十六條乃至第百六十
八條ニ送テ為スト同一ノ証拠タルヘキナリ
云々〔千八百六十七年十一月八日ノ北部獨聯
邦法律第十九條及ニ帝國建國憲法第八十條
〔四〕字漏生國訴訟法草案第百七十八條北部獨
乙聯邦草案第百六十六條ヘツセン國全草案
第百四十條參看〕
何シノ為メニ此証明ヲ要スル乎ニ付テハ此
法律ニ於テ明示スル所之アラズ只裁判所ハ
本法第百七十三條第四項ニ照シ此手續ヲ為

サ、ル可ラサルナリ〔本法第百八十六条乃至
第百八十九条ニ對スル第六解參着〕

第百八十六条 〔公然ノ送達ニ関スルノ條〕
送達ヲ為ス可キ原被告ノ居住所明瞭ナラサル
時ハ公然ノ廣告ヲ以テ之ヲ為スヲ得
外邦ニ為ス可キ送達ニ付キ之カ為メ設立シテ
ル規則ニ從テ為シ能ハサル時又ハ之ヲ為スモ
其効果ナカルヘキ時ハ亦公然ノ廣告ヲ以テ之
ヲ為スヲ得

第百八十七条

〔同上〕

公然ノ送達ハ原被告ノ請願ニ因リ受訴裁判所
ノ許可ヲ經テ裁判所書記其職權ヲ以テ之ヲ執
行スルモトス此請願ニ付テハ預メ口頭對審
ヲ為サスレテ判定スルヲ得

公然ノ送達ハ其送達ス可キ書類ノ証明シタル
謄本ヲ裁判所ノ揭示場ニ懸ケテ為スモノトス
若シ其書類中ニ呼出ヲ余令スルモノアル時ハ
其背面ヲ抜萃シテ之ヲ受訴裁判所々在區ニ對
シ職務上ノ公告ヲ掲載スル為メ定メアル新聞
紙ニテ兩面及ヒ独乙国官報ニテ一回揭示スル
ヲ要トス

受訴裁判所ハ復々他ノ新聞紙ニモ掲載シ又ハ

掲示ヲ数回為スヘキコトヲ命令シ得

第百八十八條 [全上]

書面ノ抜萃ニハ受訴裁判所ノ称号原告ノ氏名訴訟物件訴訟ノ要旨呼出しノ目的及ヒ召喚ヲ受タル者ノ出廷ス可キ時期ヲ明記セサル可ラス

第百八十九條 [全上]

呼出命令ヲ包ネアル書面ニ付テハ其抜萃ヲ新聞紙ニ掲載シタル家終ノ日ヨリ一ヶ月経過シタル日ニ送達ヲ為シタルモノト着做ス又受訴

裁判所ハ公然ノ送達ヲ許可スルニ方テ必要ト

認定スル時ハ更ニ長キ期限ヲ指定シ得

呼出命令ヲ包ネサル書面ニ付テハ之ヲ掲示場

ニ懸ケタルヨリ二週間ヲ経過シタル時ハ送達

ヲ為シタルモノト着做ス可シ

懸ケタル書面ヲ期限ニ先ツテ掲示場ヨリ取除

キタルモ送達ノ効力上ニ影響及ホサルモノ

トス

第一鮮理由ノ説明 他ノ送達ニ依テ為シ能

ハス又ハ為スノ目的ナキ止ム得サル場合ニ

於テ公告ノ送達ヲ以テ實際本人ニ為シタル

ト同一ノ効力ヲ有セシムル規則ヲ設テ以テ

本条ノ送達ノ補備ト為ス丁ハ各邦ノ法制ニ
モ之アル所トス
〔孝漏生国裁判通法第一篇第
七章第十二條乃至第十七條以下法朗西訴訟
法第六十九條バイルン国同上第百九十三條
〔六〕第百九十四條第百六條ハノール国全
上第百二十五條第百二十六條ウエルテムベルグ
国全上第百四十五條以下バデン国全上第
二百四十三條以下第三百六十七條オルデン
ボウグ国全上第九十一條フラインケンシュヴァイツ
国全上第二百七十四條乃至第二百七十七條
孝漏生国草按第百八十九條以下ハノール
国草按第百七十一條以下ヘッセン国草按第二

百四十三條以下澳斯太利国草按第百七十九
條以下サクセン国草按第百七十四條以下北
部独乙聯邦草按第二百七十三條以下參着〔而
テ此止ヲ得サル場合トハ如何ナル時ヲ指ス
乎ニ付テハ即チ本文第百八十六條ヲ以テ之
ヲ規定シ其事ノ性質ニ於テ妥當ヲ得アルノ
ミナラヌ右ニ列載セル各法制ト全ク相齊シキ
所ナリ

現ニ起リアル訴訟ニ加入セシメサルヘカラ
ナル者ニ對シテモ本文ノ如キ場合アルニ方
テハ亦公然ノ廣告送達ヲ為シ得ルナリ〔即チ
本法第六十九條以下第七十三條ニ於テ訴訟

告知ノ類又ウエルテムベルク国訴訟法第二百
五十一条参着盖字漏生国訴訟草案按ニ於テハ
法朗西訴訟法第六十九条ニ倣ヒ此公然ノ掲
示又ハ掲載ヲ以テ為ス送達ノ場合ニ於テモ
尚ホ訴訟人ノ自行ニ任カセ只豫メ裁判所ノ
先許ヲ受ケサルヘカラスト為ス所ニ於テノ
其職權上ノ行為ヲ要セシメアリト雖モ此
本法ニ於テハ之ノミナラヌ外國ニ為スヘキ
送達ニ付テモ亦裁判所ノ職權上ノ行為ニ委
ネルヲ違当ト為ス原則ニ従フタリ此原則ニ
依レルハ即チヘッセン国草案按第二百四十三条
北部独乙聯邦草案按第二百八十二条(字漏生国

裁判通法ウエルテムベルク国バヂン国オルヂ
ンボルク国ノ訴訟法ハ之ニ異ナリ加シハノ
一フル国訴訟法第二百二十五条第二百二十六条
バイルン国全上第二百九十四条ハノ一フル国
草案按第一百七十一条ニ於テハ此呼出ヲ受訴裁
判所ノ檢察官ニ委ネアルナリ
而テ水文第百八十六条以下ノ規則ハ同一事
件ニ於テ同一ノ原被告ヲ再三呼出スヘキ毎
ニ之ヲ適用スルモノトス
然レモ本法第七百四十一条第七百四十三条第
七百六十一条ノ場合ニ於テハ公然ノ送達ヲ
為スヲ要セサルナリ

第二解制定ノ沿革 各草案皆同一ナリ北部独
乙聯邦草案按ハ只其条項ノ离合ヲ異ニスルノ
ニ又国議院委負ノ議論ヲ未タセシハ此第百
八十七條乃至第百八十九條ナリシ乃チ新聞
紙ニ掲載スル丁ハ之ヲ缺席裁判ニモ擴張セ
シムルヲ希望ス何ントナレハ本法第二百十
一条第二項ノ權利保護ノ好規則モ十分ニ利
用レ得サル懼ナキニ非ラサレハナリトノ動
議アリシモ遂ニ採用セラレサリキ之ニ反シ
本法第百五十三條乃至第百五十六條ノ第五
解下ノ第六解亦參看スヘシニ説述セル趣義
ヲ此第百八十七條第二項ニ應用セシメ其送

達スヘキ書類ノ証明シタル騰本正本ヲ改テ
ヲ懸ケ又ハ書類ヨリ呼出状ヨリトアルヲ改
メノ抜萃ヲ掲載スル丁ニ議決採用セラレ後
テ此第百八十八條ニ於テ呼出状ノヲ改テ唇
類ニ作り且提出スル請求ヲ公示スル丁ト修
正シ且第百八十七條第二項ニ於テ原ト彼ノ
市場保護條例第六條ニ在ル如ク帝國普通報
告新報トアリシヲ獨乙帝國官報ニ改正シタ
リ〔本法第百八十五條第百四十二條參看
又此第百八十九條ノ第三項ハ本法第百二
十六條ト其權衡ヲ保タレメンカ爲メ追加セ
ン〕ヲ第二讀會ニ於テ再々發議アリシヨリ

漸クニレテ採用セラレタリ然レハ訣項タル
ヤ己ニ北部独乙聯邦草案按第二百八十一条ニ
掲ケアルノミナラズ理由説明ニ依レハ固ト
ヨリ此意義ヲ包含スル所ナリ「下ノ第五解参
着」

第三解原被告ノ住所不明瞭(第百八十六条又
上ノ第一解参着) 此第百八十六条ニ於ケル
原被告ナル語ハ其代理ノ關係ニ付テ通常ノ
趣義ト全相異ナルナリ「本法第百二十七條及
ニ第百二十八條ニ對スル第五解第百三十二
条第二解参着」乃チ只代人ノ住所不明ニシテ
本人ノ住所明カナル時其訴訟能力アル者ニ

付テハ直チニ本人ニ送達シ又訴訟能力ナキ
者ニ付テハ即チ其法律上代人ナキ場合ニ於
ケルト同一ノ処分ヲ為スヘレ「本法第五十五
条参着」然リト雖モ本人及ニ其代人ノ住所共
ニ不明瞭ナル時ニ方テ此第百八十六条乃至
第百八十九条ヲ適用スヘキナリ

住所ノ不明瞭ト云フニ付テ此法律ニ於テ
別ニ明定スル所アラサレハ其送達受取人ノ
居所ノ明不明ニ付テハ裁判所ノ意見ヲ以テ
之ヲ定メサルヘカウナルナリ「下ノ第四解参
着」己ニ内閣代理員ハ質問ニ答ク且更ニ説明
シテ曰必竟此規則タルヤ送達ニ関スル通則

ノ一ナリト断言シ難キ所ナキニ非ラス之ヲ
請求スル者〔此第百八十七條第一項〕ハ必要ノ
場合ニ於テ其不明瞭ヲ証明セザルヘカラス
是如ク嚴格ニ為シテ以テ此公然廣告ノ濫用
ヲ防クヲ要ス云々

又此規則ハ民法上ノ不在者ニ関スル律義ニ
干格スル所アルヘシ其各邦法ニ於テ〔サツクセ
ン民法第千九百九十条以下法朗西民法第
百十二條以下〕不在者ヲ代理セシムルノ規則
ヲ定メアル時ハ即チ本法第百五十七條ニ準
拠シ其代理者ニ送達ヲ為スヘクシテ而テ公
然ノ送達ハ之ヲ実用スヘカウサルナリ

然リ而テ此場合ニ於テ裁判所ハ其物件又ハ
場所ノ管轄ニ付テ判定スルハ本案ノ對審ヲ
関クニ至テ初テ為スヘキナリ又缺席ノ場合
ニ於テ亦然ルヘキト否トニ付テ^{應ニ}本法第
百九十六條下ニ於テ説述スヘキ所ノモノト
ス

此外理由説明ニ述テ曰バデ^ン国訴訟法第
百四十三條サツクセン国全章按第百七十四條
及ヒ澳斯太利国章按第百八十条ヲ參觀シテ
本条ノ原被告ニ公然ノ送達ヲ為ス場合ニ於
テ其者ノ為メ管理人ヲ任命セザルヘカウサ
ル乎若クハ任命シ得テ以テ仮ニ不在ノ原被

告ノ為メ訴訟上ノ權利ヲ保護シ且努トメテ
其不在ヲ搜索探知セシムヘキ乎ノ問題ヲ生
シ易カルヘキナリ然レモ此部得乙聯邦ノ許
訟法委員ノ意見ニ從ヒ本法ニ於テモ之ヲ必
要ト為サス殊ニ不在者ノ管理ニ関スル各現
行民法ハ其全部ノ財産ニ對スルト其一部ニ
對スルトニ拘ハラズ訴訟法ノ敢テ干預セサ
ル所ナルヲ以テ益其不用ナルヲ徴シタリ云
々
然リ而テバ「国訴訟法第二百四十三條ハ
純然タル訴訟法上ノ規則ナレモ本法ニ於テ
ハ之ヲ採用セサルナリ」本法実施條例第十四

條又本法第五十五條ヲ參着スヘシ
逃走者及ヒ居所不定ノ者ニ付テハ本文ノ明
文ニ適合スル時ニ限り此第一百八十六條ヲ適
用シ得ルナリ是故ニ例ヘハ其居所ノ明カナ
ル時ハ之ヲ適用スヘカラス「バデン国訴訟法
第二百四十三條ハ之ニ異ナリ」

第四解手續「上ノ第三解第二項參着」本文第百
八十七條第一項ニ付キ理由説明ニ述テ曰此
公然ノ送達ハ本法ニ依レハ原被告ヨリ請願
セサルヘカラス而テ受訴裁判所ハ先ツ其事
由ヲ審按シ「上ノ第三解參着」請願者ヲ審問シ
或ハ之ヲ為サスレテ許可ス「此請願却下ニ對

之抗告ヲ為シ得即チ本法第五百三十条参着
次テ裁判所書記ハ此第百八十七條第二項ノ
規則ニ依テ職權ヲ以テ又ハ特ニ其裁判所ノ
為シタル命令ヲ遵奉シテ執行スルモノトス

〔第百八十七條第三項〕云々

此場合ノ請願ハ亦己ニ本節ノ理由説明ニ於
テ舉述セル如ク裁判所ノ職權ヲ以テ為ス送
達ニ付テハ之ヲ要セサルナリ〔本法第二百九
十四條第五百八十二條第六百二條第六百三
條第六百十九條参着〕又裁判所書記ノ紹介ヲ
為スニ関シテハ〔本法第五百十二條第五百十
四條参着〕渡々本法第百八十二條乃至第百八

十五條ノ第三解ニ舉述セル所ニ從フヘシ
前記理由説明ニ説述セル裁判所書記カ裁判
所ノ命令ニ依テ為ス公然送達ニ付テノ職事
ヲ北部独乙聯邦草按第百八十二條ニ於テ
左ノ如ク明ホシタリ

公然ノ送達ハ原被告ノ如ク為ラ要セスシテ
裁判所書記之ヲ執行スルモノトス〔上ノ第
一解第二項参着〕

〔第五解公然ノ送達ノ程式〕〔上ノ第二解及ヒ第百

八十七條第百八十八條第二項〕理由説明ニ
白公然ノ送達ノ程式タルヤ即チ凡呼出ヲ包
ネサル送達即チ必ス己ニ起リアル訴訟中ノ

送達ニ付テハ〔例一ハ公然ノ呼出送達ヲ受テ
ル訴訟人ニ對スル缺席裁判ニ付テハ字漏生
国章按第百九十六条ヲ參着スヘシ〕裁判所ノ
掲示場ニ懸ルヲ以テ足レリトス北部独乙聯
邦章按第二百七十五条參着〔然レハ公然ノ呼
出ニ付テハ〔本法第百九十一条以下〕送達ノ有
効ナル為メ更ニ新聞紙ノ掲載ヲ要トス而テ
此兩送達共ニ本文第百八十九条ニ定メアル
期限間掲示場ニ懸クルヲ例トスト雖モ後令
之ニ先テ取消キタリトテ送達ノ効用ヲ毀ク
ルヲナキナリ〕〔本法第百二十六条及ヒ上ノ
二解參着〕呼出ノミニ係ルモノハ場合ニ依リ

成ルヘク簡約ニ要旨ヲ採萃シテ之ヲ新聞紙
ニ掲載スヘキナリ云々
本法ニ於テ裁判ヲ掲載廣告スルヲ規定セ
サルハ〔上ノ第二解參着〕從來ノ多數ノ訴訟法
ニ反對スルノミナラス又渾ヘテ呼出ハ公然
廣告ニ得ルト定ルモ一奇ト為スヘシ例一ハ
期日変更ノ為メニ為ス次回ノ呼出〔上ノ第一
解及ヒ本法第百九十五条參着〕又ハ上訴裁判
所ノ呼出ヲモ亦之ヲ公告ニ得ヘキナリ抑此
上訴呼出ニ関シテハ即チ此第百八十六条以
下ト本法第百六十一条ト相連貫
シ難キニ至ラシムヘシ蓋此第百六十一条第百

六十一条ハ住所明瞭ナル者ニ付テノ懲戒
スルノ趣義アル所ナレハナリ

第六解送達ノ附属書 公然ノ送達ヲ執行スル
ニ方テ添付スヘキ証書ニ付テハ本法第百七
十三条第四項ニ送テ之ヲ処分スヘキナリ〔本
法第百八十二条乃至第百八十五条ノ第七解
参看〕内閣代理負ハ之ニ付キ説明シテ曰法律
ノ意義ニ依リ必ス原本ヲ添テ送達ス其原本
ニ送達ヲ果行シタル旨ノ証明ヲ裁判所揭示
板ニ懸クルノ方法ニテ添付ス此時ニ至テ原
本ノ謄本ヲ懸ルナリ〔上ノ第二解参看〕何レニ
モ謄本ハ裁判所ニ留置スル了ナレ云々而テ

職権上ノ送達ニ付テハ此説明ヲ以テ論スヘ
カウサルハ固トヨリ言ヲ俟タス

第七解公然ノ送達ノ効用〔第百八十九条〕理由

説明ニ曰此第百八十九条ニ於テ示定スル期
限ハウエルテムベルグ国訴訟法第百四十九
条第百五十一条等漏生国章按第百九十三条
第百九十六条及ヒ北部獨乙聯邦章按第二百
七十八条第百七十九條ニ相同シト雖モ他
ノ法制〔カールデンボルク国訴訟法第九十一条
第三バデン国全上第百四十六條サツクセン
国章按第百七十六條〕ニ於テハ之ヲ揭示シ又
ハ新聞紙ニ掲載シタル当日ヲ以テ送達ヲ為

シタルモノト定ムアルナリ蓋本法ハ頗ル寛
優ナル規則ヲ定メタリト云フヘシ云々
此第百八十九条第三項ニ付テハ上ノ第二解
第三解ヲ参看スヘシ

第百九十条 第百八十二条乃至第百八十四
条ニ依ル送達及ヒ公然ノ送達ノ反動力ニ関
スルノ條

他ノ官廳若クハ官吏ニ囑託シ又ハ公然ノ廣告
ニ依テ送達ヲ為サンコトヲ請願スル書面ヲ添ヘ
テ書類ヲ呈出シタルニ因リ先ツ送達ヲ為シタ
ル時其送達ニ依テ期限ヲ維持シ又ハ期滿免除

若クハ期限ノ進行ヲ中断スル場合ニ限り其
請願書提出ノ日ヲ以テ已ニ送達シタルノ効力
ヲ生スルモノトス

第一解理由ノ説明 裁判所執行吏又ハ郵便ヲ
以テ為ス送達ハ原被告自ラ注意シテ之ヲ急
速ナラシメント努トメタラシニハ乃チ必ス
其送達ノ如何ニ関スルモノニ限り適当ノ時
期ニ於テ期限ヲ保持シ又ハ期滿免除若クハ
期限ノ進行ヲ中断シ得ヘキナリ 本法第二百
十二條第二百十四條第二百三十九條第三百
四條第四百七十七條第五百十四條第五百四
十條第八百六條其他参看

然レ此此第百八十二条乃至第百八十九条ノ
場合ニ至ラハ之ニ異ナリテ乃チ原告ニ於
テ送達ニ付テハ裁判所ニ正当ナル請願ヲ為
スノ他ニ施スヘキ術ナク且其適当ノ送達ハ
一ニ訣当官司ノ公平ナル補助若クハ種々ノ
適然ノ場合ニ關係スルナリ此如キ場合ニ對
シテ其不在者ニ向テ期限其他ノ維持ヲ為シ
易カラシムル為メニハ其送達請願ノ提出ノ
時機ヲ以テ送達ノ効力ヲ生セシメタル規則
ヲ設ケ置ハ実ニ必要ナリハノ一ナル國草按
第百七十二條字漏生國訴訟法草按第百九十
三條北部独乙聯邦草按第百八十条參看然

ルニ本法ニ於テハ右ノ成績ニ屬セシムルニ
更ニ其送達ヲ果行シタル了ヲ送達發付人ニ
明示スルノ頗ル實際ニ効用アル規則ヲ以テ
シテ〔本法第百三十九条及ヒ本法實施條例
第十三條(四)及ヒ其第三項參看〕其送達ハ先ツ
實ニ果行セラレタル了ヲ知ラシメテ以テ其
効力ノ起生ハ偏ニ請願ヲ為シタル當日ニ在
ルト定メタリ送達發付人ノ為メニハ又不利
ナルニ非ラス若シ實ニ對手人ニ交付シ能ハ
ス例ヘハ其住所不分明ナルカ為メ之ヲ為シ
得サル時ハ此第九十条ノ規則ニ從ヒ公然ノ
送達ヲ以テ足レリトスヘケレハナリ必竟公

然ノ送達ト云モ第百八十九条ノ期限ヲ経過
シタルハ現実ニ本人ニ交付シタルト其効
カヲ同フスルナリ〔下ノ第五解參看〕
之ニ及ビ本法第百八十二条以下ノ非常ナル
送達ニシテ長キ時日ヲ要スルモノニ對シ例
外トシテ特定スル規則ヲ治安裁判所管轄ノ
訴訟ニハ恒例ト為ス裁判所書記ノ紹介ニマ
テ及ホサシムルハ甚奇觀ト云ハサルヘカラ
ス〔北部獨乙聯邦草案按第二百十三條參看〕然リ
而テ其主義ニ相當ウサルモ尚ホ且裁判所會
記ノ紹介ニ頼ルハ之ヲ會記ノ親ヲ為ス任命
ニ頼ルニ比スレハ更ニ利便ヲ享受スル所ハ

敢テ茲ニ論セス若シ原被告ニシテ本文ニ於
ケル如キ必需ノ場合ニ際シ直接ニ為シ得ル
送達方法ト迂遠ナル方法トノ一ヲ任意ニ選
択シ得ルトハ云フト云モ故ラニ其迂遠ナル
方法ニ依ル時ハ又之ヲ恕スヘキニ非ラサル
ナリ

〔第二解制定ノ沿革〕

北部獨乙聯邦草案按第二百
十三條ニ関シテハ上ノ第一解ヲ參看スヘシ
而テ訣單按第二百八十条ニ於テハ本條ノ規
則ヲ更ニ公然ノ送達ノニニ制限シ且速ニ之
ヲ送達スルヲ必トセサルナリ又李漏生國草
按第百七十六条ニ於テハ北部獨乙聯邦草案按

ニ同シト然レ只之ヲ外國ニ為ス送達ニ及
ホシアルナリ

此他ノ各章按ハ皆同シ而テ國議院委員會ニ
於テ異議ナリ採用セリ〔本法第百七十六條乃
至第百八十條ノ第一解參看〕

〔第三解請願〕 本條ハ原被告ノ請願ニ因ルノ趣
義ナリ是故ニ職權上ノ送達〔本法第百九
四條第百八十二條第百六十二條第百六十三條
第百六十九條〕ニハ適用スヘカラス蓋職權上
ノ送達ニ付テハ本法第百八十九條ノ規則ニ
從テ送達ヲ為スヘキナリ

〔第四解囑托〕 蓋本條ノ行文ハ更ニ明確ニ綴リ

得ヘカラン必竟裁判所執行吏及ヒ裁判所書
記モ亦郵便送達ノ為メ郵便局官吏ニ囑托ヲ
為スナリ〔本法第百七十七條第百七十九條參
看〕然リ而テ此囑托ヲ為ス為メ原被告ノ請願
ヲ送テ要シタル所〔上ノ第二解參看〕ト本條ノ
位置トニ依レハ即チ理由説明〔上ノ第一解〕ニ
於テ只本法第百八十二條乃至第百八十四條
ニ從テ送達及ヒ本條ノ送達トニ制限スルノ
義ナリト解釈セルノ妥當ヲ見ルヘキナリ
獨リ郵便ニ托シテ送達ヲ為ス場合〔本法第百
六十一條〕ニ於テハ其交付スヘキ書類ヲ郵便
局吏ニ付與シタルノ當日ヲ以テ本人ニ送達

シタルノ曰ト者做スナリ

第五解先ツ送達ヲ為ス
趣義ハ即チ本法第百八十二条乃至第百八十四條ノ送達ナレハ其送達シタル証明ヲ本法第百八十五條第二項ノ意義ニ依テ之ヲ為シ且公然ノ送達ナレハ本法第百八十七條第百八十八條ノ規定ニ準シテ之ヲ為スノ意ヲ包有スルナリ

此先ツノ字義ニハ一定ノ期限アルモノト解ス勿レ然ラサレハ本條ノ目的ニ違フヘシ本條ニ於テハ此字ノ意義ハ法ニ依リ又ハ法ニ從ヒノ義ニ齊シキナリ必竟本字ハ速ニノ義

アルヲ以テ寧ロ他ノ文字ヲ用フルヲ可トスヘカラン

此理由説明〔上ノ第一解第二項參看〕ハ其含蓄スル趣義ヲ敷衍シテ本法第百八十二条乃至第百八十四條ニ準シテ為ス送達ノ執行ニ付テノ請願ニハ若シ之ヲ為シ得サル場合ノ為メ公然ノ送達ヲモ請願スルノ意ヲ自ラ保有シアルモノナリト説明シタリ果シテ然ルヘレト雖モ原被告ニ於テ此請願ヲモ当初ヨリ明示シテ為スヲ良シトスヘシ

第六解期限及キ期滿免除
送達上他ノ効用例ハハ裁判確定ノ到達故障申立期限ノ経過ニ

付テハ本条ニ依ルモノニ非ラズシテ本法第
百八十九条ニ従フ可キナリ

第三節 呼出及ヒ期日及ヒ期限

第一百九十一条 〔呼出ハ原被告ニ於テ為スノ

條

期日ノ為メ呼出ス〕ハ本案又ハ附帶ノ訴訟ニ
付キ口頭對審ヲ為サントスル原被告ニ因テ之
ヲ為スモノトス

訴状又ハ他ノ書面ヲ呼出ト同時ニ送達ス可キ
時ハ呼出ハ之ヲ背面中ニ記載ス可シ

第一百九十二条 〔全上〕

代言人訴訟ニ於テ口頭對審ノ為メ呼出ス時其
送達ヲ代言人ニ為スニ非ラサル場合ニ於テハ
受訴裁判所ニ屬スル代言人ヲ指定シテ出スヘ
キ〕ヲ對手人ニ要メサル可ラス

第一百九十三条 〔全上〕

呼出ハ期日指定ノ為メ之ヲ裁判所各記ニ呈ス
可シ

呼出ノ期日ハ裁判長二十四時間内ニ之ヲ指定ス
呼出ハ止ヲ得サル場合ニ限り日曜日又ハ普通ノ祭祀日ヲ指定ス可シ

〔第一解理由ノ説明〕 本文第百九十一条第百九十三条ハ即チ一般ノ理由説明〔即チ本書凡例第九回第十回ニ挙述セル原則ノ施用ヲ明定シタル所トス即チ

〔第一〕 期日ノ為メ呼出ス即チ對手人共同訴訟人其他訴訟ニ関係スル人〔訴訟参加人訴訟告知人ノ類〕ニ向テ期日ニ出廷スヘキヲ要ムルノ義ニシテ原被告善ク

前節ノ規則ニ従テ之ヲ為スナリ而テ其効力ハ従来ノ裁判所ノ呼出ト是モ減損スル所ナシ〔本文第百九十一条第一項

〔第二〕 期日ハ裁判長ノ指定スル所ナリ〔本文第百九十三条第二項又本法第百二十七条第三項参着〕

右ノ二個ノ原則ニ付テハ左ノ解釈ヲ要スヘシ即チ

〔一〕 裁判官期日ヲ指定スヘキ通則ノ特例ハ即チ治安裁判所ノ審理ヲ規定スルニ付キ便宜ノ為メ之ニ依ラシメサル所是ナリ〔本法第百六十一条第百六十二条参着〕

〔三〕原被告ノ一方本按又ハ附帶ノ訴訟ニ付
キ口頭對審ヲ為サント欲スル時ハ原被告
呼出ヲ為サ、ルヘカラス而テ呼出ハ裁判
所書記ニ呈出ス但其期日ヲ指定スルカ為
メノ、〔本文第百九十三條第一項又本法第
二百三十三條參看〕蓋其呼出ヲ記載シアル
書面中ノ事件ニ付テ審査ヲ為シ〔本文第百
九十一條第二項〕以テ程式上候ニ趣義上實
ニ採用スヘカラスルノ請願ヲ發見シテ之
ヲ却下スルハ口頭對審ノ主義ニ背反スヘ
シ必竟此主義タルヤ口頭ニテ訟廷ニ於テ
陳述スル所ニ因テノ、判決ヲ為スヘキニ

在レハナリ是ニ由テ之ヲ觀レハ北部獨乙
聯邦草按〔第二百十八條〕ニ於テ原被告ノ一
方ヨリ請求スル口頭對審ノ為メノ期日指
定ハ之ヲ拒否スルヲ得スト殊更ニ規定明
示シアルハ言フ俟タサル當然ノ、事ニシテ
即チ不用ノ冗贅ト云フヘシ乃チ一般ノ理
由説明〔本書凡例〕第九回ニ約示セル如ク訴
訟ニ付キ裁判所ノ幫助スルハ僅ニ其程式
ニ過キサルノ、事ニ獨リ特例トシテ之ニ異ニ
スルヲ要スヘキハ即チ婚姻事件後見事件
揭示手續是レナリトス〔本法第百七十一條
第百九十七條第百二十四條〕

裁判所書記ハ呼出ヲ裁判所々長〔治安裁判官〕又ハ受託者クハ受命ノ裁判官〔本法第二百七条参着〕ニ適當ノ時期即チ其呼出請求昏ニ二十四時内ニ期日ヲ定テ記載シ得且之ヲ要ムル原被告ヨリ其呼出ヲ送付シ得ルノ時宜ヲ量テ呈ス〔本文第百九十三條第二項又ハノ一フル国訴訟法第百四十三條同国單按第百七十六條北部独乙聯邦單按第二百十七條参着〕而テ短キ期限ニ付テハ其呼出ヲ包ネタル一定ノ書面〔訴狀上訴狀ノ類〕ヲ斟酌シテ選定スルヲ要スヘシ何ニトナレハ送達ノ時期ハ原被告ニ大ナル利

害ヲ及ホスモノニシテ且其時期ノ遲滯ハ損害ヲ生スレハナリ必竟是ヲ顧慮シテハノ一フル国單按〔第百七十七條〕ヘツセン国全上第百五十四條〔澳斯太利国全上〕第百八十八條ニハ預ノ期日ヲ指定スルヲ送達スルモ法律上其効力アリ且對手ハ後日期日指定ヲ特更ニ請求スルノ權アリト規定シタルナリ

然レ氏本按ニ於テハ北部独乙聯邦訴訟法委員ノ意見ニ倣ヒ前項ノ規則ヲ採ラサルハ即チ實際ニ適當ナラザル所アリトスルニ由レリ蓋訴狀又ハ他ノ書面〔故障申立狀

上訴状ノ類ヲ呼出ヲ包ネスレテ送達スルハ猶ホ未定ナル期日ニ呼出スカ如ク對手人ニ向テ律義上ノ効用ハ更ニ之レアラサ
ルヘシ〔下ノ第六解參着〕

裁判長期日ヲ示定スルニ付テハ須ク現場ノ景況法律上竝短ノ期限〔本法第百二十三條第百九十四條第百三十四條第百四十四條第四百五十六條第四百五十九條第四百八十一條第四百八十四條第五百十七條第五百十九條第五百六十七條第六百三十六條其他參着〕又ハ呼出スヘキ訴訟人ノ特別ノ申立アレハ之ヲモ參酌シテ定ムヘ

キナリ〔本法第百四條參着〕

〔三〕言渡しタル判決〔裁判決議命令〕ニ指定シ

アル所ノ期日ノ為メニハ呼出ヲ為スヲ要

セス〔本法第百九十五條又北部独乙聯邦草

按第百十五條參着〕而テ口頭對審ノ席ニ

於テ言渡しタル期日ハ其席ニ原告若クハ

被告又ハ兩造缺席スルトモ尚ホ呼出ノ代

用ヲ為スナリ〔本法第百八十三條第百

九十四條第百九十五條參着〕然レモ後解ニ拳述ス

ル事由アリテ本法第百三條第百七十八條

第百九十九條第百一十條第百一十一條

第百一十二條第百一十三條第百一十四條

シテ即チ期日指定ノ言渡シアリタリ出
廷セル原被告ハ缺席スル對手人ヲ新定ノ
期日ニ呼出サ、ルヘカラサルナリ下ノ第
四解及ニ本法第百九十五条併ニ其註解參
看

〔四〕豫メ審理期日ヲ言渡サスシテ職權ヲ以
テ期日ヲ指定シ若クハ更改シ又ハ職權ヲ
以テ中止シ若クハ閉ケタル審理ヲ繼續シ
若クハ之ヲ再ニ開ケ時ハ職權ヲ以テ之ニ
関スル議決又ハ命令ヲ送達シテ原被告ニ
期日ヲ通示ス本法第百九十四条第三項
參看乃チ其議決若クハ命令中ニ呼出ノ程

式ヲ具備シ且期日ニ出廷スヘキ旨ノ要求
ヲ明記シアラサルヘカラサルナリ而テ此
呼出ハ原被告ヲシテ要メシムルニ非ラス
シテ職權ヲ以テ之ヲ為スヘキナリ〔本法第
百九十五条並ニ第三百三十六條第二項第
六百九十五条第二項北部独乙聯邦單按第
百五十七條參看〕

期日ノ指定ヲ言渡サ、ル場合トシテ茲ニ
枚舉シ得ヘキハ即チ例ヘハ本法第三百十
七條第三百二十六條第三百三十一條第三
百三十三條第三百三十五條並ニ第三百十
九條第百四十一条第百四十二條ノ如キ是ナ

リ下ノ第三解参着

[五]証人及シテ監定人ヲ訊問スル為メ呼出ヲ為スニハ原被告ニ由ラズシテ必ズ職權ヲ以テ之ヲ為スヘキナリ

[本法第三百四十二

条第三百六十七條参着]

上ノ第二下ニ掲ル裁判官期日ヲ指定スル

ノ原則ニ反對シテ相對立セシハ即チライ

ン州法朗西法制ノ行ハル、地方ニ施用シ

且大ニ称讚シテ置カサル所ノ手續ナリト

ス

此次ニ法朗西国召喚制ヲ詳ニ記述シアリ

ゲンフ府ノ法律ハ法朗西ノ召喚制ヲ採用シ

アラス而テ訣法ニ依レハ呼出ニハ期日ヲ確

示スルノ制ナレバ亦裁判所長ノ必ズ指定ス

ヘキ規則ニ之アラサルナリ又法朗西召喚制

ハ同時ノウイストフアレシ王国ノ民事裁判制

中ニモ亦之ヲ見ス抑此制タルヤ殊更ニ弊害

ヲ生スルモノナラサルノミナラズ反テ便益

ヲ為シタル事例ヲ舉テ大ニ之ヲ証徴セル所

アリ

新定ノ法制中ニシテ法朗西ノ法制ニ倣フタ

ルハバイルン国ノ訴訟法ナリ字漏生国草按

モ亦大ニ倣倣スル所アルナリ之ニ反シハ、
一ツル国草按ヘツセン国草按澳斯太利国草按

北部独乙聯邦草案及ヒ「ウェルテムベルグ」
ニオールドンボルグノ三訴訟法ハ独乙訴訟規
則ニ拠リタル所ノハノール國訴訟法制ヲ
是認シ乃チ為メニ起訴ニ因テ生スル訴訟ノ
拘束ハ獨リ原被告兩造間ニ止ラス之ヲ裁判
スル為メ出訴セラル、裁判所ニ對シテ亦拘
束ヲ受ケ仮令程式ノミニ過キサレモ起訴ノ
当初ヨリ裁判所ニ從屬スル丁トハナレリ
本法ヲ起按スルニ方テハ能ク各種ノ訴訟整
理召喚制ノ利害得失ヲ研究シテ遂ニ独乙法
制ニ多数ノ賛成ヲ得テ之ニ從フ丁トハナレ
リ殊ニ期日ノ確定ヲ裁判官ニ委ヌルノ制ハ

裁判所ニ於テ事務整理ヲ確保シ且ニ各訴件
ノ景況ノ異同ニ從テ能ク之ヲ酌量シテ処理
シ又代言人ノ行為上ノ義務アルニモ拘ラス
能ク訴訟ノ進行及ヒ終了ヲ迅速ナラシムル
ニハ尤適當ト云フヘシ

前項ニ付テハ「ウィルンツ」氏帝國法律及ヒ聯邦
法律新報千八百七十七年度ノ分ヲ參看ス可
シ

〔第二鮮制定ノ沿革〕 北部独乙聯邦草案ニ付テ
ハ上ノ第一鮮及ヒ下ノ第五鮮ヲ參看ス可シ
他ノ各草案ハ皆同一ナリ而テ國議院委員ノ
會議ニ付キ茲ニ擧スヘキモノハ即チ「バデ

ン国バイルン国ニ於テ法律上用ヒ未リタル
タリダフルトヲ此¹テルミ¹ン期日ナル字ニ換
用セントノ動議ハ棄却セラレタリ又内閣代
理員ハ質問ニ答テ訴件ハ件数ニ照シテ之ヲ
分配シ每件特別ナル期日ノ時刻ヲ指定スル
ヲ例トスト説明シタリ
起稿委員ハ本文第百九十二条ニ付キ数字
ヲ削除シテ以テ此規則ハ代言人訴訟ノ各場
合ニ適用スルノ義ニ修正シタリ是レ緊要ナ
ル改正ニシテ而テ議事筆記録ニハ之ヲ明示
シアラサルナリ

第三解原告ノ為ス呼出及ヒ職權上ノ呼出

北部独乙聯邦草按第二百十條ニハ
呼出ハ此法律ニ於テ別ニ規定シアラサル
限り之ヲ要ハル原告ニ於テ之ヲ為スモ
ノトス

トアリテ之ヲ本文第百九十一条ノ行文ニ比
スルニ更ニ明確ナリ蓋本文第百九十一条ノ
明文ニ依レハ之ヲ抵觸スル規則ハ一切禁止
スルカ如シトノ誤解ヲ生シ易クシテ且其取
除規則ヲ要スル場合ハ本條第一解ニ依ルニ
極メテ僅少ナルナリ又理由説明^上ノ第一解
〔四〕ニ於テ職權上ノ送達ト称スル場合ニ付テ
ハ書ニ解釈ヲ以テ説明スルニ止メス更ニ法

律ノ補充ヲ為スヲ要ス而テ本法第三百十七
条第三百三十一条第三項第三百三十五条第
二項ニ於テハ一、期日ノ指定及ヒ通知ハ職
權ヲ以テ之ヲ為スト明示シアルモノニ付テ
ハ彼ノ解釈ニシテ固トヨリ十分ナリ
又本法第一百四十二条既ニ閉クル審理ヲ再ヒ
開クノ条ニ關シテハ本条ノ理由説明ニ拠ル
ヲ要スヘシ何ントナレハ即チ是レ原被告ノ
任意ニ出テ能ハスシテ全ク裁判所ノ職權上
ノ事務ニ屬スルモノナレハナリ
之ニ反シ理由説明中ニ同ク別舉シアル本法
第三百三十九条及ヒ第四百十条ニ關スル審理

中止ノ取消^獨リ口頭對審ノ終結ニ於ケルノ
ミナラスニ付テハ一疑問アルナリ殊ニ本法
第二百二十七条ニ付テハ更ニ困難ナリ何ニ
トナレハ該条ニ於テ其中止審理ノ再開ニ付
テハ其通知手續ト共ニ此第四節ノ規則ニ裁
制セラル、^ナクシテ書類ノ送達ヲ要トス
ルヲ以テナリ又本法第四百一条ハ裁判所
直チニ期日ヲ指定スヘキノ權利及ヒ義務ナ
キノ趣義ナリ是故ニ只其審理中止ヲ取消ス
議決ヲ原被告ニ通示シ其后ノ行為ハ之ヲ原
被告ニ放任スルノミ
蓋理由説明ニ於テハ集議院委員ノ職務上ノ

著作ヲモ是認セサルヲ以テ更ニ之ヲ法律ノ
檢閲者トハ為シ得サルヘシ〔本法第五條第二
解參着〕

又本法第三百二十六條第三百三十三條ニ付
テハ即チ其行文ニ依レハ職權上ノ呼出ト解
シ易カラスト雖モ然カモ元來本法ハ概シテ
立証ニ関シテハ其原被告自己ニ要ムルヲ除
キテ之ヲ裁判官ノ訴訟上ノ整理ト定メアル
ナリ〔本法第五十二條第一解參着〕是ニ於テ
期日ハ職權ヲ以テ指定ス必竟本法第三百二
十六條ニ於テモ第三百三十三條ニ於ケルカ
如ク之ヲ明文ニ揭示スルヲ良シトスヘカラ

レ而テ此如キ議決ハ本法第二百九十四條第
三項ノ範圍ニ屬スヘキモノナルカ故ニ若シ
之ヲ宣告セサル時〔本法第九十五條〕ハ職權
ヲ以テ原被告ニ送達セサル可ラス

〔第四解〕 本法第九十一條ト第九十五條トノ

關係 ウフ氏ハ異見ヲ立テ凡ソ期日ノ指定

ナルモノハ裁判所又ハ裁判長ノ議決ニ係ル
ヲ以テ本法第九十五條第二百九十四條第
四項ノ明文ニ於テハ敢テ原被告ヨリ呼出ヲ
要ムルノ必要ヲ見ス乃チ此第九十一條ヲ
適用スヘキ所ナシト蓋氏ノ意見ノ如クナリ
ト為スモ尚ホ上ニ明舉セル北部獨乙聯邦草

按第二百十條ノ行文ヲ以テ大ニ優レリト云
フヘシ而テ缺席ノ審理手續ノ外ハ此法律ヲ
重シシテ尋常ノ期日指定ハ裁判官ノ指令ノ
性質ノモノニ非ラズシテ只程式上ノ趣義ナ
リト為レテ之ヲ編縫スヘキナリ〔第一解〕〔二〕〔三〕
〔首〕然リト至モ理由説明ニ於テ〔第一解〕〔三〕〔首〕
本法第三百條第一項第三百二條第三百十六
條第一項第五百七十八條第二項第六百十一
條ノ缺席ノ審理手續ハ之ヲ例外トスルニ付
テハ其ウアフ氏ノ異見ヲ取捨シテ擧ケサルヲ
遺憾トスルナリ右各條ノ場合ニ於テハ純然
タル議決ニ関スル所ニシテ而カモ各條呼出

云々ヲ明ホセサルニ非ラザレバ何人ヨリ之
ヲ為ス乎ニ至テハ未タ曾テ明言シテアラス必
竟本法第三百條第三百二條第三百十六條第
五百七十八條第六百十一條ニ付テハ其法律
ノ明文ニ從ヒ且理由説明ノ解叙ヲ取ラサル
ハ本法第九十九條第十條ト相抵觸シアリテ第
二百九十四條第三項トハ抵觸セスト見ルヘ
キナリ然レバ著述者ノ意見ハ理由説明ノ解
叙ヲ賛成セント欲ス何シトナレハ第三百條
第三百二條第三百十六條第五百七十八條第
六百十一條ニ規定スル呼出ハ原ト法朗西訴
訟法ヨリ採用シテ制定シテ而カモ原被告ニ

由テ為サルヘキノ意義ナリト解キ得又果シ
テ然ラストセハ即チ已ニ此缺席裁判制ノ懲
戒ノ嚴重ノミテモ殆ント堪ヘサラシムル所
之アルヲ以テナリ

第五解裁判長〔水文第百九十三條第二項〕所長
ハ理由説明〔第一解〕〔二〕ニ舉示スル点ノ外尚ホ
必ス期日ノ時刻ヲモ指定スルヲ注意セサ
ルヘカヲサレナリ上ノ第二解及ヒ本法第百
九十七條第三解參看又水書凡例〔原各第八十
四〕第十八行及ヒ第二十五行ニ誤植シアル
裁判所昏記ハ裁判長ト改正シテ讀ヘキナリ
而テ初審事件ニ付キ期日ヲ指定スルニ付キ

裁判長ハ實驗スル所ニ後ニ多クハ原被告ノ
缺席又ハ延期〔本法第二百五條〕スルニ因リ又
ハ缺席裁判ニ由テ之ヲ終了シ得ヘキヲ注
意スルヲ要ス是ニ於テ一閱廷日ニハ十二乃
至十四件ヲ指定シ得ヘシ又若シ一回ニシテ
結審スルニ至ルノ時間ナキハ更ニ延期〔本
法第二百六條〕シテ之ヲ補充スヘシ蓋口頭對
審ニ定メタル期日ノ一部分タリトモ之ヲ供
用ヤスシテ空過スルニ比スレハ更ニ優レル
ナリ上未ノ理由ニ因テ數件ノ為メ同一時刻
ヲ指定シ得ヘシ
又上級ノ裁判所ニ於テハ裁判長ハ其積聚シ

ナル訴件ニ就テ一件ノ口頭對審ニ要スル時
間ヲ量リテ以テ開廷スヘキ期日ノ數ヲ異定
シ得ヘシ

實ハ其簡便ナルヨリレテ往々期日ノ指定ヲ
各記ニ委ネ裁判長自ラ之ヲ為サ、ルコトアル
氏是レ迄ニ許スヘキ所ニ非ラズ裁判官ノ裁
断ニ拠ラサレハ一日ニ多數ノ件ヲ指定シ又
ハ少數ニ失スルノ弊アルニ由レハナリ

第五解呼出ノ條件 此第百九十二条ニ付キ理

由説明ニ曰本法ニ於テハ呼出ニ明示スヘキ
條件ニ付キ特ニ規定(北)部独乙聯邦草按第百
八十四条第百九条)スルハ之ヲ不用ト認メ

タリ如何ントナレハ呼出ノ各場合ニ於テハ
其期日ヲ示シ且呼出スヘキ人ノ氏名ヲ指ス
ハ言ヲ俟タスレテ自ラ明瞭スヘキカ故ナリ
独リ為サ、ルヘカラスト定メテ明示セラルハ
即チ代理人訴訟ニシテ呼出ラ為ス場合ニハ
代理人ヲ指定シテ出スヘキノ要求ノミナリ
独乙各邦ニ於テ代理人訴訟ノ制裁新施ニ付
テハ訴訟ヲ新ニ為シ又ハ訴訟ノ進行ヲ更ニ
開ク等之ヲ整理スル各呼出ニハ代理人任命
ノ要求ヲ為スニ至リタリ而テ其呼出ハ之ヲ
本人ニ為シテ代理人ニ為サルハ蓋實際上重
要トスル所ナリ云々

己ニ本条第二解ニ舉述セル如ク前解ニ論レタル水人呼出ノ制限ハ本文第百九十二条ヨリ除作セラレタリ

乃チ代言人訴訟〔本法第七十四条第一項參看〕ニ於テ水人ニ送達スヘキ呼出ニハ必ス代言人任命ノ要求ヲ明記シアラサルヘカラス若シ之ニ違フハ本法第三百条(二)ニ照シテ缺席怠慢ノ責ヲ負ハシメ難キモノトス

上解ニ載スル理由説明ノ冒頭ニ云々ト説明シアルニモ拘ハラス呼出ノ条件ニ付テノ特別ハ本法第二百三十条(三)ニ掲ケアリテ而カモ本法第四百五十六条ニ依リ之ヲ治安裁判

所ノ審理ニモ又本法第五百四十八条第五百五十一条ニ依テ再審手續ノ場合ニモ適用シ得ル所ナリ此他本法第四百七十九条三、第五百十五、三、ニ於テモ亦之ヲ明掲シアルナリ本文第百九十一条第二項ニ示ス程式上ノ規則ハ本法第二百三十条第四百七十九条第五百十三、三、ニ因テ自ラ其趣義ヲ明カニスルヲ得ヘシ

第六解呼出ニ付テ必要トスル理由説明ニ依レハ〔本条第一解(三)ノ第二項參看〕猶豫期限ヲ恪遵シテ之ヲ為スヲ以テ違法ノ呼出トスルナリ乃チ裁判所長ハ期日指定ノ為メ二十

四時ノ猶豫ヲ有ス〔本文第百九十三條第二項〕
是ニ於テ裁判所昏記ニ呈出スルニハ〔本文第
百九十三條第一項〕其二十四時ヲ徒ラニ經過
セシメテ危害ヲ被ラサルヲ期シテ適當ノ時
ニ於テ為スヲ要ス然レハ此嚴密ナル規則ハ
本法第百九十条第百十三條ノ為メ稍々寬
恕セラル、所アリ即チ期日指定ノ為メ呼出
ヲ裁判所昏記ニ呈出スルト共ニ本法第百八
十二條乃至第百八十六條ニ准拠シ其送達ニ
付テノ請願ヲ併セ為スヲ得ルナリ然レハ其
請願ヲ提出スルノ時ヲ以テ送達ヲ為セルモ
ノト着做シ得ヘレ〔本法第百九十条參看〕

且之ヲ裁判所書記ニ呈出スルニ付テハ〔本文
第百九十三條第一項〕本法第百五十四條ニ准
拠シ其自ラ為シ得ヘキ送達ニシテ特ニ之ヲ
明言セサル時ハ其送達ヲ書記ノ紹介ニ依テ
セラルト為スヘシ故ニ此時ヨリシテ本法
第百二十五日ノ期限ヲ起算スヘキナリ
第七解裁判所休暇及ヒ日曜日並ニ祭祀日 裁
判所編制法第百二條乃至第百四條ト本
法第百二條一條ヲ对照シタル所ニ依レハ裁判
所ノ休暇時ハ期日指定ノ為メ書面ヲ出スヲ
妨ケス即チ二十四時ノ期限ノ起算ヲ妨ケサ
ルヘシ然レハ〔巴〕テン 国訴訟法第百七條ニ

於ケルト同ク日曜日祭祀日ハ裁判所休暇時
ナルモノ、中ニ算入セス後テ祭祀日ニモ期
日指定ノ書面ヲ提出シ得ヘキ乎且此第百九
十三条第二項ノ二十四時ヲ此時ヨリ計算ス
ヘキ乎ノ疑問ヲ生スヘシ而テ此疑問ニ付テ
ハ素ト期限ノ起始ニ関スル所ナルヲ以テ渡
々水法第二百条第二項ノ趣義ニ基キ然リト
答フヘキナリ然レ氏之カ為メ裁判所書記ハ
必ス此日ニ其廳局ニ出勤シアラサルヘカラ
サルモノト解釈スヘカラス蓋此如クニ解セ
シメサルハ復々閱廳時間外殊ニ夜中ニテ
モ書面提出ヲ受取スル為メ裁判所書記ハ出

廳シアルモノト誤解スルノ惧アルヘシ又書
面提出人ハ其提出ニ付キ特別ナリシ場合ニ
付キ之ヲ呈出シタル時間ノ証明ヲ受領セサ
ルヘカラサルナリ
水文第百九十三条第三項ニ明示スル普通祭
祀日ニ付テハ宜ク水法
第百六十五条乃至第百七十一条ノ第十解ヲ
参看スヘシ

第百九十四条 呼出期限ニ関スルノ條
拘束ヲ為シタル事件ニ於テ呼出ノ送達ト期日
ノ當日トノ間ニ存ス可キ期限呼出期限ハ代言

其人訴訟ニ在テハ少クモ一週間其他ノ訴訟ニ在テハ少クモ三日歳市及ヒ週市事件ニ在テハ少クモ二十四時トス

理由ノ説明及ヒ制定ノ沿革及ヒ解釈 本条ノ理由説明ニ付テハ本法第百九十八条第一解ヲ参着スヘシ而テ北部独乙聯邦草案及ヒ字漏生国草案ニ於テハ歳市及ヒ週市事件ノ文字アルヲナシ其他ノ各草案ハ本条ニ同シ国議院委員ノ第二読會ニ於テ内閣代理員ハ呼出期限ノ不違法ナルニ因リ其指定ノ請願ヲ却下スル場合ニ関シ説明ヲ為シタリ此説明ハ本法第百九十八条第一解第二解ト共ニ本

条ノ解釈ニ供用シ得ヘキモノトス即チ曰是レ固トヨリ答辨期限ニ非ラズシテ呼出期限ヲ云フナリ即チ己ニ拘束ヲ生シタル事件ニ付テノ期限ナレハ通例代言人ヲ任命シアルヘキナリ若シ原被告兩造其期日ニ仮令其指定ノ短キニ出廷シタル以上ハ敢テ更ニ指定スルヲ要セズ 本法第百六十七条並ニ第二百二条第二項第百五条第二項第百四十五条第二項参着 然レモ呼出ヲ受ケタル原告ノ一方缺席シ且其對手人ヨリ缺席處分ノ請願ヲ提出シタル中ハ則チ裁判所ハ其呼出期限ハ之ヲ定規ニ為シタルヤ否ニ付キ職權

ヲ以テ調査セサルヘカラス若シ定規ニ違ヒ
アウサルキハ缺席者ヲ更ニ呼出ノ手續ヲ為
サ、ルヘバウサルナリ〔本法第三百条(二)及ヒ
同条第二項並ニ第三百二条参看〕
呼出期限ノ短縮ニ付テハ本法第二百四条ヲ
参看スヘシ又其之ヲ延長スルハ裁判所長ノ
意見ニ在ルナリ必竟本条ニ示ス所ハ只其家
庭期ヲ示シタルナリ通例繁忙ナル裁判所ニ
於テハ呼出期限ヲ超過シテ期日ヲ指定ス
歳市事件及ヒ週市事件トハ素ノ一ノ術語ナ
リ本法第三十条並ニ其第一解乃至第五解ニ
依テ理會シ得ヘシ

第九十五條 呼出ヲ要セサルノ条

言渡シタル判決ニ於テ指定シアル期日ニ付テ
ハ原告ノ呼出ヲ要トセス

〔理由ノ説明及ヒ制定ノ沿革及ヒ解説〕 本条

ハ北部独乙聯邦草案ニ在ルヲ原文ノ終ニテ
各草案ニ採用セラレタルモノトス而テ北部
独乙聯邦草案ニ付テハ此「ウ」氏ノ駁論シタ
ル判決ナル語ニ付テ公正ノ解説ヲ付シアリ
テ且其第二十一節ノ標題ニハ「裁判、決議及ヒ
命令」判決ト明示シアルナリ反テ其後ノ各草
案及ヒ本法ニハ此標題ヲ用ヘス是故ニ理由

説明ノ公正解叙〔本法第百九十一条乃至第百九十三条ノ第一解〕〔三〕参着ハ往々任意ニ為ス可アリ

本条ニ付キ国議院委員第一読会ニ於テ言渡ニ参席シタル原被告ニ制限セントノ動議アリシモ採用セラレサリシ其之ヲ採ラサルノ理由ハ即チ理由説明ニ述ヘタル意見ノ原被告ノ缺席ハ以テ裁判言渡ノ効力ヲ斥ル能ハサルヲ規則ト為ス所ニ扱レルナリ
「ウ」ルンツ氏ハ其新報ニ本条ニ適スル例証トシテ立証決議〔本法第三百二十六条第三百三十五条又第百九十一条乃至第百九十三条ノ

第三解参着〕ヲ舉タルハ妥當ト云フヘシ此他須ク一般ノ理由説明及ヒ本法第百九十一条乃至第百九十三条ノ第三解第四解ヲ参着スヘシ

第百九十六条〔期日ヲ関スルノ条〕

期日ハ裁判所ノ訟廷ニ於テ之ヲ関クモノトス但實地ノ臨檢又ハ裁判所ニ出廷シ能ハサル者ノ審理若クハ其他裁判所ノ訟廷ニ於テ執行ス可ラサル處分ヲ為ス可キ時ハ此限ニ在ラヌ各邦君主及ヒ其家親並ニホーヘンツルレシ候家ノ親族ハ親ラ裁判所訟廷ニ出ワヘキ義務

十キ元ノトス

理由ノ説明及ヒ制定ノ沿革及ヒ解叙 理由説
明ニ舉ル所ハ即チ裁判所編制法實施條例第
五條ニ對スル理由説明ノ第二項ヲ參着スヘ
シト云フノ外ナラス復々本法實施條例第五
條並ニ其註解及ヒ本法第三百四十條第二項
第四百四十一條第二項ヲ參着スヘキナリ
字漏生国草按第百八十二條ニハ本條ノ第二
項ヲ舉ケス蓋是レ實施條例ニ屬セシムヘキ
トノ理由ニ因ルナリ其他各草按ハ大要本條
ニ齊シ而テ国議院委員會ニ於テ異議ナク採
用セリ

抑期日ハ裁判所訟廷ニ関ケヘキハ固トヨリ
當然ニシテ敢テ言テ俟タムサルナリ故ニ本
條ハ其例外ヲ示スヲ專ラニ為シタルモノト
知ルヘシ
北部独乙聯邦草按第二百十六條ニ於テハ此
出廷シ能ハサル者ヲ疾病若クハ違和ナル語
ヲ以テ詳示シアルナリ然リ而テ本條ノ規則
ハ代言人及ヒ其他ノ訴訟代人ニ適用スヘカラ
ス蓋是等ハ代人ヲ任用シ得レハナリ之ニ反
シ代言人訴訟ニ非ラサル以上ハ又原被告本
人自ラ訴訟ヲ為スノ權利アルヲ考フヘシ本
法第七十五條參着

本条第一項ノ末段ニ其他云クノ処分トアル
ハ即チ例ヘハ原被告本人ノ宣誓ヲ取リ証人
ノ訊問ノ要ヲ概括スルナリ是ニ依レハ又裁
判出張負ハ本法第三百四十条多數ノ証人ヲ
訊問スル為メ其共ニ住居スル地方ニ出張ス
ルノ権利アルヲ知ルヘレ

第百九十七條 期日ノ時限ニ関スルノ條

期日ハ事件ノ喚上ケテ始ルモノトス
期日ハ其終リマテ原被告ノ一方ニテ對審ヲ為
サ、ル中ハ缺席セラレタルモノトス

第一解理由ノ説明 期日ノ缺席ハ對審ノ終時

ニ至テ初テ生スルナリ〔本法第百二十七条第
四項參着〕而テ事件ノ呼上ケニ際シテハ在ラ
スレテ期日進行中ニ漸ク出廷セル原被告ヲ
許ス中ハ事務ヲ妨ケ且無効ノ審理ヲ醸成シ
得ルモノトノ諒見ヲ抱ク勿レ然リト至モ期
日ノ開始ニ在ラサル者ハ即チ缺席ト為スノ
原則ハ甚タ過嚴ニレテ〔千八百三十三年六月
一日頒布ノ字漏生国宣令第二十一条上等裁
判院ノ豫審裁判例第六百二十六号ハノ一フ
ル国訴訟法^法第百四十七条オルデンボルグ国全
上第九十四条第四參着〕而カモ本法ニ於ケル
全ク缺席不參ヲ為シタル申立及ヒ辨明〔本法

第二百九条第二項、第二百九十五条以下參看
ニ関スル原則ト相適合セサルノミナラス又
其性質上許容スヘカラサルナリ必竟此原則
ハ苛酷ニ失レ易キノミニ止ラズ其言渡シタ
ル缺席裁判ハ故障申立ノ手續ニ依テ之ヲ取
消シ得ルヲ例トシテ徒ラニ時間ト費用トヲ
冗費スルニ過キサル所ナレハナリ〔李漏生国
草按〕第百二十七条及ヒ其理由説明ハノ一
ル国草按第百八十条北部独乙聯邦草按第
百二十条及ヒ二草按ノ議事筆記録ウルテム
ベルグ国訴訟法第百五十八条バデン国全
上第百九十一条第三項參看

〔第二鮮制定ノ沿革〕 北部独乙聯邦草按第百
二十条ニ於テハ若シ期日ニ時刻ヲ限テ指定
シアル時ハ其時刻ニ至ラサル前ハ事件ノ呼
上ケヲ為スヲ許サズ又裁判所ハ事件呼上ケ
ノ後ニ於テ同日ノ他ノ時刻ニ審問ヲ延レ得
ルノ規定ヲ為シアルナリ此他ノ各草按ハ皆
本条ト其趣義ヲ同フス
国議院委員會ニ於テ異議ナク本条ヲ採用シ
タリ但本条ニ関係アル本法第百九十三条ニ
對シ某議員ハ説明ヲ為シテ曰抑本法ニハ期
日ノ時刻及ヒ所謂ノ缺席懲戒ノ時刻ナルモ
ノニ付キ更ニ明示スル所之アラズ然レ各期

日ニハ必ス時刻ヲ指定シ此時刻ニ依テ缺席
裁判ヲ為シ得ルモノト看做シテ可ナラント
内閣代理員ハ此意見ニ賛成スルコトヲ明言シ
タリ〔本法第百九十一条乃至第百九十三条ノ
第二解及ヒ下ノ第三解第四解參看〕

第三解期日ノ起始 本条第一項ハ裁判長親ラ
又ハ裁判所書記ノ為スヘキ公式ニ係ル規則
ナルナリ〔本法第百二十七条及ヒ第百二十八
条ニ對スル第一解參看〕此外尚ホ又期日ノ起
始及ヒ缺席裁判ヲ與ヘ得ヘキ機會ヲ定ムル
モノトス然ルニ本法ハ旧來ノ差異ヲ仍ホ未
タ解理セサルナリ乃チ裁判長ハ各事件ニ付

キ本法第百九十三条ニ於テ制止シアラサル
ヲ以テ〔本法第百九十一条乃至第百九十三条
ノ第五解參看〕期日ノ時刻ヲ指定シ得ルハ言
フ俟タサルヘシ然レモ法律ニ之ヲ規定シア
ラサルカ故ニ敢テ其義務アリトスルニ非ラ
ス是ヲ以テ裁判長ハ又獨乙普通法ニ於ケル
カ如ク單ニ其期日スルノミニ止ムルモ妨ケ
スレテ即チ凡ヘテ呼出ヲ受タル原告ハ事
件喚上ケノ時對審ヲ為シ得ルカ為メ期日ノ
開庭時刻ヨリ出廷シアラサルヘカラサルヘ
シ或ハ裁判長ハ法朗西訴訟法ニ依テ慣行ス
ル如ク渾ヘテノ期日ハ一般ノ開庭時刻ヲ期

レ得ヘシ是レ前段ト其効果ヲ同スルモノナ
或ル場合ニ於テハ其呼出状ノ記載ニ更ニ影
響ヲ及ホサルヲアリ即チ裁判所揭示場ニ
其日ノ事務ヲ揭示シ各期日事件ヲ順次ニ序
レテ之ヲ処理スル場合是レナリ
此方法ハ裁判所ノ為メニハ便宜ナレバ訴訟
人及ヒ代理人ニハ甚タ忍ビ難キ所ナリ
是ニ於テ挙述セル所ノバデン国訴訟法第百
九十一条ト相合セサル不檢束ナル意見〔本法
第五條ノ第二解參看〕ヲ法律ニ採用シ寧ロ之
ヲ明定シテ各期日ノ指定ニハ時刻ヲ確示ス
ヘキトト為スノ優レルニ若カサルヘシ

若シ裁判長ハ時刻ヲ指定スルモノト定ムル
トハ其呼上ケハ該時刻前ニ為スヘカラス
ハ自ラ明瞭ナルノミナラス且本法第百六
條ニ依リ其時刻ヲ確定シアルニ拘ハラヌ
上ケ後ノ時刻ニ對審ヲ延ヘ得ルハ裁判所ノ
権内ナルハ敢テ疑ヲ容ルヘカラス是故ニ上
ノ第二解ニ挙タル北部独乙聯邦章按ノ規則
ハ益要用ト為サルナリ

〔第四解期日ノ終期〕 蓋各事件ニ付テ期日ノ時
刻ヲ指定スルナリ〔上ノ第三解參看〕又ハ其
指定シタル時刻ノ経過シタル場合ニ付テハ
即チ理由説明〔上ノ第一解〕ニ説述スル所当然

ナルヘシト雖モ而カモ又若シ對審ノ終了ノ
指定シタル時刻前ニ在ル場合ニ付テ疑問ヲ
免カレサルナリ即チ例ヘハ口頭對審ノ為メ
ノ期日ノ時刻ヲ午前第九時ト指定シアルハ
正ニ第九時ニ事件喚上ケテ為スニ方テ何人
モ之ニ應答スル丁ナリ若クハ只原被告ノ一
方ノミ出廷シテアリテ而テ僅ニ二三抄時間ノ
陳述ヲ為シテ缺席懲戒ノ請願ヲ申立タル場
合ノ如キニ方テハ乃チ直チニ期日ノ終リタ
ルモノト看做シ〔水法第二百二十八条第二項
參看〕或ハ缺席裁判ヲ為シ得ヘキ乎持テ九時
ナル時間即チ第十時ニ至ルマテ俟タサルヘ

カラサル乎ノ疑アルナリ国議院委員會ニ意
見〔上ノ第二解參看〕ニ於テ右ノ第一ノ嚴酷ナ
ル趣義ヲ採レリ是レ曰字漏生ノ訴訟手續及
ト帝国高等商事裁判院ノ慣行ニ齊シキ所ト
ス之ニ反レバデン国訴訟法第百九十一条第
二項ニ依レハ即チ此律義ヲ寛大ナル趣旨ニ
解釈セシム蓋諛国ニ專ラ行レタル所論ニ因
レルナルヘシ然リ而テ一定ノ時刻ヲ示シテ
呼出スト云フノ稱呼ニ付テ之ヲ論スルハ
バデン国ノ規則ハ孤立單行ノモノト云フモ
過言ニ非ラサルヘシ必竟遂ニ一般ノ各訴訟
法ニ採用セラル、ニ至ラサルヲ以テモ其大

方ノ注意ヲ喚起スルニ望ラサルナリ

第五解期日ノ缺席 本条第二項ニ依リ尚ホ理

由説明ノ趣義ヲ参酌スレハ期日ノ缺席ハ違

当ノ時限ニ於テ喚上ケテ為ス中原被告両造

共ニ出廷シアラサレハ即ケ本条第三解第四

解ニ説述スル所ト共ニ生スヘキナリ然ル時

ハ期日ハ己ニ経過シ若クハ缺席セラレタル

モノト認定レ本法第二百二十八条第二項参

着且其遅刻シテ出廷スル原被告ハ對審ノ為

メ又ハ缺席懲戒ノ申立ノ為メ之ヲ審理スル

了ヲ為サ、ルナリ

原被告両造遅参スル場合ニ付テ其当日尚ホ

對審ヲ為サシムルト否トハ之ヲ裁判所ノ斟

酌ニ任カスヘキナリ元来本法第二百二十八

条第二項ハ只原被告ノ一方他ノ對手ノ一方

ニ對スル場合或ハ原被告合意シテ裁判所ノ

執務ヲ妨ケル如キ場合ニ付キ之カ裁判ヲ為

スニ在テ反テ裁判所執務上之ヲ便宜トシテ

任意ニ遅参ノ原被告ヲ對審セシムルニ付テ

ハ更ニ制止セサルナリ本法第二百二条第一

項第二百五五条参着

適當ノ時限ニ事件喚上ケテ為シタル時原被

告ノ一方ノ出廷シアリテ且審理ヲ受ルニ

方テ其缺席セル一方遅参シタル場合ニ於テ

裁判長ハ本法第百二十四条第四項ニ依リ未
タ審理ノ終結ヲ言渡サシル間ナレハ其缺席
ノ懲戒ヲ為シ能ハサルナリ例ヘハ原告タル
者遲参シタルニ未タ審理ノ終結ニ至ラサル
中ハ其訴訟ハ仍然起訴ノ能力ヲ保有ス故ニ
審理ヲ開カサルヲ得ス而テ既ニ終結シタル
審理ヲ再ニ開ク中遲参スル場合ニ於テモ尚
ホ然リ〔本法第百四十二条及ニ第百四十一条
並ニ第百四十二条ニ對スル第四解参看〕

第百九十八条 期限経過ノ起始ニ関スルノ
條

裁判官ノ定ム可キ期限ノ経過ハ其之ヲ指定ス
ルニ方テ別ニ定ムル所アラサル限リハ期限ヲ
指定シタル書面ノ送達ヲ以テ始マリ若シ送達
ヲ要セサル場合ニ在テハ期限ノ告示ヲ以テ始
マルモノトス
送達ヲ以テ始マル法律上ノ期限又ハ裁判官ノ
定ム可キ期限ノ経過ハ送達ヲ為サシメタル原
被告ニ對シテモ亦其送達ヨリ始マルモトス
第一解期限ニ付テノ一般ノ原則 理由説明ニ
於テ本法第百八十七条〔即テ現今ノ第百九十
四条〕ニ對シ期限ノ一般ノ原則ニ付キ左ノ説
述アリ即チ曰

本法ノ期限ニ付テハ左ノ条件ヲ辨セサル
ヘカラス

〔第一〕答弁期限 即チ訴状控訴状若クハ上
告状ノ送達ト口頭對審ノ期限トノ間ニ存
在セシメサルヘカラス時間是ナリ〔本法
第二百三十四條第四百五十九條第五百十
七條第五百六十七條第二項參看〕是ニ付テ
ハ裁判所編制法第百二條ニ拠ルヘキナリ
〔第二〕呼出期限 即チ己ニ拘束ヲ生シタル
事件ニ付キ呼出ノ送達ト期日トノ間ニ存
在セシムヘキ時間ナリ〔本法第百九十四條
第四百五十六條第四百六十二條參看〕

〔第三〕準備書類ノ送達ニ付キ定ムル期限即
チ

答弁各控訴ノ答弁各上告ノ答弁各〔本法
第二百四十四條第四百八十四條第五百
十九條參看〕此他ノ準備書類〔本法第百二
十三條第二百四十五條第二項參看〕ニ付
テノ期限トス

〔第四〕猶豫期限 本法ニ於テ猶豫期限ト称
スルハ即チ

故障申立〔本法第三百四條〕控訴上告〔本法
第四百七十七條第五百十四條〕即時ノ抗
告〔本法第五百四十條第二項〕裁判更正及

と裁判取消ノ請願〔本法第五百四十九条〕
失権裁判ニ対スル不服訴訟〔本法第八百
三十五条〕仲裁々判役ノ判定ニ對スル不
服訴訟〔本法第八百七十条〕ニ付テ規定シ
アル各期限是レナリ

〔第五〕法律上ノ期限及ヒ裁判官ノ定ム可キ
期限 裁判官ノ定ム可キ期限トハ即チ
裁判官ノ示定スル所ニシテ而カモ其期
限ノ長短ニ付テハ法律ヲ以テ之ヲ明示
シ又ハ法律ヲ以テ許ルシアル制限内ニ
於テ裁判官任意ニ斟酌シ得ヘキモノ是
ナリトス之ニ屬スヘキハ各并期限呼出

期限準備昏面ニ付キ定ムル期限〔然レ下
ノ第二詳參着等ナリ又法律上ノ期限ト
ハ裁判官ノ示定ヲ俟テ進行ヲ始ムルニ
非ラスシテ必ヤ法律ニ因リ一定ノ訴訟
上ノ行為ニ直接ニ係累シテ始マルモノ
トス〔例ヘハ原被告ノ昏面ノ送達ノ類是
ナリ〕之ニ屬スルハ凡ソ猶豫期限ト称ス
ルモノ原期回復ノ請願期限〔本法第二百
十二条〕第二百十三條〕事實ノ更正〔本法第
二百九十一条〕裁判ノ進補〔本法第二百九
十二条〕并償命令ニ対スル異議ノ申立〔本
法第六百三十二条〕第六百三十四條〕其他

〔新入ノ第六百五条〕ナリトス然リ而テ此
二種ノ期限ノ内部ノ差異ハ即チ之ヲ延
長シ又ハ短縮スルニ付テノ規則ニ依テ
見ルヲ得ヘシ〔本法第二百二条第二百四

条参着

抑本法ハ法朗西及「バイルン」二國ノ法制
ニ反レハ「ノール」ヘ「セ」北部独乙聯邦ノ
三草按ニ於テ採用シタル從來ノ「ハノール」
ル「国訴訟法制」ニ倣フヲ以テ法律上ノ期限
ヲ裁判官ノ斟酌ニ依リ其範圍内ニ於テ伸
縮セシムルヲ許ス所多クアラシメタリ蓋
法朗西国バイルン國ノ法制ニ依レハ裁判

所外ニ係ル規令ニ付テハ必ス確定ノ期限
ヲ守ルヘキノ趣義ナレバ然カモ獨乙普通
法ノ主義及ヒ立法上独リ相当ト為スヘキ
所ノ主義ヲ奉レハ乃チ各訴件ハ其實際ニ
為レ得ル程度ニ從テ之ヲ迅速ニ結了セシ
ムルヲ要シテ而テ其期限ノ規定ト虽モ最
短期ヲ明示シ其他ハ事件ニ應レテ裁判官
ノ斟酌ニ委スルヲ以テ是ナリトスルナリ
必意法律上定メタル期限ハ事件ノ千差萬
異アルニ拘ハラヌ必ス同一ニ止ルヘキナ
リ顧テ事件ニ從テハ中庸ニ依リ適當ト考
定シタル所ニ基テ定メタル期限モ遂ニハ

事實ノ繁多ニシテ且錯雜ナルカ為メ殊ニ
之カ周到ナル豫備ヲ必需スルアリテ適ク
其十分ナラサルノ場合ナキニ非ラサルヘ
シ然レハ則チ因テ以テ生スル結果如何ヲ
繹スレハ期限ノ延長其他實際ニ堪フヘカ
ラサル凡百ノ煩雜ヲ見ルノニ蓋此結果タ
ヤ仮令法律上定メタル期限ハ裁判官ノ斟
酌ニ依テ延長シ得ト規定スルニ或ハ其態
様ハ異ナルヘキニ到底未タ避クヘカラサ
ル所ナルヤ必セリ
殊ニ答弁期限及ヒ呼出期限ニ関シテハ對
手人ノ外国ニ居住スル場合ニ付キ各法制

ニ於テ補充期限ナルモノ、制規ヲ設ケテ
リト雖モ而カモ此補充期限ニ付テノ普通
ノ規則ハ必ズ錯雜ヲ免カレ能ハスシテ例
ヘハ「バイルン」國訴訟法第二百九條參看却
テ「ゲン」府訴訟法ハノ「フル」國訴訟法ニ
拠リタル水法第二百三十四條第二項第三
百四條第二項第四百五十九條第二項第四
百八十一條第五百十七條ニ於ケルカ如ク
特別ナル場合ニ方リ之ヲ要スル中ハ裁判
官ノ意見ヲ以テ特別ノ期限ヲ指定シ得ル
モノト為スノ優レルニ若カサルナリ然リ
而テ呼出期限ニ関シテ補充期限ノ必要ヲ

見ス何ントナレハ本法第二百二条第二百
五条第二百六条ノ期限及ヒ期日ノ変更ニ
関スル規則アリヲ已ニ充分ナレハナリ云

第二解裁判官ノ定ムヘキ期限及ヒ法律上ノ期

限 本法第九十七条〔現今ノ第二百四条〕ヲ

議スルニ方テ一議負ハ意見ヲ述フルノ趣意

ハ即チ前解ノ理由説明ニ依ルモ答弁期限及

ヒ呼出期限ヲ裁判官ノ定ムヘキ期限中ニ加

フルハ不當ト云フヘシ是レ必ス法律上ノ期

限ニ屬スルナルヘレト云フニ在リ内閣代理

員ハ之ニ答解ヲ為シテ曰彼ノ理由説明ニ於

テテ解説スル所ハ恰モ学理上ヲ嚴守シタル

ノニ其実未定ト云フヘシ抑裁判官ノ定ムヘ

キ期限ト云ヒ又法律上ノ期限ト云フモ未タ

一定スルニ至ラズシテ諸説紛然タルナリ是

故ニ答弁期限及ヒ呼出期限ナルモノハ裁判

官ノ定ムヘキ部分ナルト否トニ付テハ宜ク

之ヲ解説スル理論者ニ委スヘキ而已云々

前項ノ疑問ハ度々本条第一解〔三〕ニ奉タル送

達期限ニ付テモ之ヲ起シテ可ナリ然レモ此

事タルヤ実務家ニ對シテハ重要ナラス何ン

トナレハ明示スル三種ノ期限ハ皆尙短期ヲ

奉ケタル所ニシテ而テ之ヲ延長シ得ルハ更

ニ言フ俟タサレハナリ〔本法第百九十四条註
解ノ末段參着〕且之ヲ短縮スル丁ニ付テハ即
チ本法第百四条ニ於テ之ヲ明示シアルノ
ミナラス本法第百二条第二項ノ干涉セサ
ル所ナリトス

第三解本条ニ対スル理由ノ説明及ヒ制定ノ治
革及ヒ解釈〔理由説明ニ曰裁判官ノ定ムヘ
キ期限ノ経過ハ其之ヲ指定スルノ際別ニ定
ムル所ナキハ期限ニ付キ指定スル丁ヲ記載
シアル書類ノ送達ヲ以テ始マリ〔原告ノ書
類例ヘハ本法第百九十四条ニ係ルモノ又ハ
裁判官ヨリ送達セシムル書類即チ宣告セサ

ル決議又ハ指令ノ送達〕或ハ其送達ヲ要セサ
ル時〔本法第百九十四条參着〕ハ其期限ヲ告
示スルヲ以テ始マルナリ〔空ルテムベルグ国
訴訟法第百五十九条ハノール国草按第
百八十一条李漏生国草按第百八条北部独
乙聯邦草按第百二十一条參着〕蓋此告示ヲ
以テ始マルモノト為ス規則ハ之ヲ前段ニ比
スレハ更ニ適切ト云フヘシ如何ニトナレハ
素ト裁判其他宣告シタル決議及ヒ命令ノ送
達ハ原告ノ手中ニ在ルカ故ニ裁判官期限
ヲ指定スルニ付キ其判決ノ送達ヨリ期限ノ
始マルモノトセハ抑テ以テ期スル所ノ斟酌

ハ甚タ茫漠ナリ易ケレハナリ之ニ反シ宣告
セサル決議及ヒ命令ニ付テハ素ト職権ヲ以
テ送達スヘキモノナルニ因リ自ラ前段ニ異
ナリ〔本法第二百九十四条參看〕而テ其告示シ
タル期限ノ経過ハ之ヲ告示スルノ中在ラサ
ル原告ニ對シテモ同一ナリト知ルヘシ〔本
法第二百九十四条第二百八十三條參看〕
裁判官ノ定ムヘキモノト法律上ノモノトニ
論ナリ期限経過ノ起始ハ送達ニ由テ生スル
モノトセハ〔例ヘハ故障申立期限控訴期限上
告期限ノ如シ〕即チ其期限ノ起始ハ常ニ送達
受取人ノミニ限ラズ亦之ヲ為サシメタル對

手人ニ對シテモ成立タルモノトス蓋此規則
タルヤ既ニバイルン国訴訟法第二百十條ハ
ノ一フル国草案〔第一百八十二條〕ヘツセン国草案
〔第二百六十條〕澳斯太利国草案〔第一百九十二條〕
北部独乙聯邦草案〔第二百二十二條〕字漏生国
草案第二百九條ニ明示シアルカ如ク原告
兩造間ニ於テ送達ノ時日ニ送ル〔ウルトムベ
ル〕ケ国訴訟法第二百六十條其期限ノ起始及
ヒ経過ニ相異同ヲ生スルノ弊ヲ避ケルニ在
リ乃チ同時ニ重複ノ送達ヲ互ニ為スノ義ニ
テ其送達費用ハ一方ニ偏セサルヘシ云々
各草案皆相齊シ而テ国議院委員會ニ於テ異

議ナク採用シタリ

蓋本条第一項ハ只裁判官ノ定ムヘキ期限ニ付テノ規定スル所ニシテ而テ法律上期限ノ起始ニ付テハ上ノ第一解〔五〕ヲ参看スヘシ之ニ反シ其第二項ハ裁判官ノ定ムヘキ期限ト法律上ノモノト而ツナカラ規定スルナリ本条ノ兩項共ニ適法ノ送達及ヒ告示ヲ以テ要旨トナセリ乃チツイルレ府ノ裁判院ニ於テ判決セル實例アリ即チ送達ノ不完備ニ因リ控訴期限ノ経過ノ進行ヲ送達受取人ニ対シ始メシメサル時ハ送達發付人ニモ亦其効力ヲ與ヘレマス是レ上ノ理由説明ニ述フルカ

如ク期限ノ起始ハ原告被告兩造ニ對シ同時ナルヘシトノ理由ニ依レル所ナリ

第一百九十九条 [期限ノ計算ニ関スルノ条]

日ヲ以テ指定シタル期限ノ計算ニ付テハ其期限ノ始マルヘキ時期又ハ事故ノ相當スル日ヲ算入セサルモトス

第二百条 [全上]

週又ハ月ヲ以テ指定シタル期限ハ最初期限ノ始マリタル日ニ終期ノ週又ハ月ニ於テ其名稱又ハ數ノ相當スル日ノ経過スルヲ以テ終ルモ

ノトス若シ此日終期ノ月ニ在ル_レナキ時ハ其
月末ノ日經過スルヲ以テ期限ノ終リトス
期限ノ終リ日曜日又ハ普通祭祀日ニ當ル時ハ
其次ノ労働日ノ經過スルヲ以テ期限ノ終リト
ス

〔第一解理由ノ説明〕 本文第百九十九条及ヒ第
二百条ニ於テハ期限ノ計算ニ付キ規定スル
所ニシテ而カモ独乙帝国高法第三百二十八
条第三百二十九条第三百三十条帝国為替条
例第三十二条第九十二条並ニハノール国
訴訟法〔第百四十六条〕ウエルテムベルグ国全上
〔第百六十一条以下〕ハノール国草按〔第百

八十三条第百八十四条北部独乙聯邦草按〔第
二百二十三条乃至第二百五十五条〕字漏生国
草按第二百十二条乃至第二百五十五条ニ其大
要ヲ齊_フスル所ナリ而テハ「八日若クハ十四日」
ト明ニ指定シタル期限ニ関シテハ本文第百
九十九条ニ舉_ケタル曰_テ「除キ滿八日又ハ滿
十四日ノ義ト解スヘキ」〔帝国高法第三百二
十八条〕〔二〕參_照並ニ日ヲ以テ指定シタル期限
ハ其最終ノ日ノ經過スルヲ以テ終ル_レニ付
テハ特ニ之ヲ説述スルヲ要セサルヘシ〔字漏
生国草按第二百十三条第二百十四条北部獨
乙聯邦草按第二百二十四条第二百五十五条

参着

又此条ニ関係アルハノルフル国草按〔第百八十五条〕ノ規則ニシテ多数ノ共同訴訟人ニ付キ各異ニ期限ノ経過ヲ為スヘキ場合ニハ其最終ノ経過期日ヲ以テ他ノ共同訴訟人ノ経過期ト為ス所ハ「バイルン」国訴訟法第百十条澳斯太利国草按第百九十五条参着〔遂ニ本法ニ於テ之ヲ採用セズ必竟共同訴訟人ニ関スル原則〔本法第五十八条参着〕ニ全ク特定ノ一通则ヲ制定セサルヘカラサル要ムハ之アラズ蓋本法第五十九条ヲ以テ止ヲ得サル共同訴訟人タル場合ニ付テハ己ニ相當ノ規

則ヲ設ケアレハナリ〔本法第五十八条第四解第五十九条第五解参着〕

第二解制定ノ沿革及ニ解釈 各草按皆同一ナ

リ特リ北部独乙聯邦草按ハ上ノ第一解ニ挙ケタル点ニ於テ異ナル所アルノミ而テ国議院委負會ニ於テ更ニ異議ナカリシ
己ニ高法第三百二十八条乃至第三百三十条ハ実地ニ能ク良効ヲ呈シアルナリ故ニ解釈ニ付テハ諛法ニ譲テ可ナリ

北部独乙聯邦草按第二百二十五条第一項ニ曰ヲ以テ定ムル期限ハ其期限ノ最終ノ日ノ経過スルヲ以テ終ルモノトス

トアル明条ヲ採用セサルニ付キ疑問ヲ起サ
シムルナリ是レ必竟本法ニ於テハ我治罪法
第四十二条ト同文ニシテ更ニ日ノ経過ノ終
リニ付キ示ス所之アラサルニ由ル而テ其家
終ノ日ハ當日ノ全部ヲ算入スヘキ乎将々其
何分時ノミニ止ル乎ヲ明寔セサルモノ、如
クナリ然リト至モ本文第百九十九条ニ於テ
此時点ヨリ彼ノ時点マテヲ以テ算スルハ
原則上採ラサル趣義ナルヲ以テ復々北部柱
乙聯邦草案按ノ第百二十二条ニ齊ク最
終ノ日ノ経過ヲ俟テ期限ハ終ルモノト為ス
ヘキナリ例ヘハ十四日ト指定シタル期限ヲ

七月一日午前第八時ニ於テ送達セシメタル
ハ其期限ノ起始如何ニテ問ヘハ則チ本文第
百九十九条ニ照レ七月一日ハ之ヲ期限ニ算
入セス而テ其終リハ十五日ノ子夜第十二時
ヲ経過スルニ在ルナリ
日ト称スルハ曆日ヲ云フ即チ子夜第十二時
ヨリ全第十二時ヲ以テ期限ト為スナリ
普通ノ祭祀日ニ付テハ本法第三十条及ヒ其
註解ヲ参看スヘシ
本文第百条ハ治罪法第四十三条ト其行文
ノモ同クス
又第百条第二項ハ其行文ニ依レハ日ヲ以

ヲモ亦期限ヲ定ムル所ニシテ〔第百九十九条〕
而テ只期限ノ最終ニ付テノミ明示ス蓋其起
始ハ日曜日又ハ祭祀日ナリトモ送達及ヒ期
限ノ為メ指定シ得ル以上ハ亦タ之ヨリ起美
シ得ヘシ〔本法第百七十一条第百九十三条及
ヒ第百九十一条乃至第百九十三条ノ第六解
参看〕又裁判所ノ休暇ニ付テハ次ノ第二百一
条ニ於テ特ニ定ムル所アリ

本文第二百条第二項ノ明文ニ從ヘハ本法第
百九十三条第二項ニ定ムル二十四時ノ期限
ニ付テハ適用スヘカラス蓋此期限タルヤ其
性質ヨリ之ヲ觀ルニ全ク特別ノモノナリ

第二百一条 〔裁判所休暇ノ能力及ヒ猶豫期
限ニ関スルノ条〕

期限ノ進行ハ裁判所ノ休暇ノ為メ遮断セラル
ヘシ其期限ノ残剩ハ休暇ノ終ヲ以テ進行ヲ始
ム又期限ノ起始休暇中ニ相當スル時ハ亦其終
ヨリ期限ノ進行ヲ始ムルモノトス
前条ノ規則ハ猶豫期限及ヒ休暇事件ニ於ケル
期限ニハ之ヲ適用セサルモノトス
猶豫期限トハ此法律ニ於テ特ニ明示スル期限
ニ限ル

〔第一解理由ノ説明〕 本条ハ法律上期限及ヒ裁

判官ノ指定スヘキ期限ノ起始及ヒ進行ニ対
シ裁判所休暇ノ影響ヲ及ホスヘキ所ニ付テ
規定スル所ニシテ而テバ^レン国訴訟法^レ第二
百六条^レハノ^レ一^レフル国草按^レ第百八十六条^レノ規
定スル所ハ裁判官及ヒ原告ノ為メ休暇時
限ヲ短縮セシメ得ルノ趣義アルニ反シテ期
限ノ進行ハ休暇中ニ起始セシムルヲ許サス
又休暇ト共ニ進行スルヲモ許サス必ス休暇
中ニ當ル期限ノ起始ハ休暇ノ終リタル日ノ
翌日ヨリ起算モ又期限中休暇時ノ起ルニ遭
ヘハ則チ其期限ノ残剩ハ休暇ノ終リヨリ再
ニ進行セシメテ休暇中之ヲ中断スルノ規則

ナリ是レ休暇ナルモノ、性質ヲシテ能ク其
慈仁ノ意ヲ保持セシムルニ過キサルナリハ
ノ^レ一^レフル国訴訟法^レ第百五十条^レウ^レルテムベル
グ国同上^レ第百六十三条^レホルデンボルグ国
全上^レ第九十五条以下^レ李漏生国草按^レ第百二十
一條^レ北部独乙聯邦草按^レ第二百二十六条^レハ水
法ノ規定ニ同シ
例外ノ特則ハ猶豫期限及ヒ休暇事件ニ関ス
ル期限ニ對スルナリ此ニ期限ハ休暇中ト至
モ起始ヲ為レ又進行スヘキ性質ノモノナリ
ハノ^レ一^レフル国訴訟法^レ第百五十条^レホルデンボ
ルグ国全上^レ第九十五条^レ第二^レ李漏生国草按^レ第

ヨリノ行文ニ比スレハ違切ナラヌ然レ其
意義ニ於テハ必ス理由説明ニ在ル行文ノ趣
義ナルヲハ歴然タルヘシ之ニ付テハ本条ノ
規則ノ外渡々本法第百九十九条第百条ヲ
モ参酌スヘキナリ乃テ例ヘハ七月十四日ニ
送達ヲ為シタル時ハ其期限ハ全ク休暇ノ終
リタルヨリ進行ヲ始ムルナリ休暇ノ終リノ
翌日日曜日又ハ祭祀日ナルハ其翌日ノ勞
働日ノ経過スルヲ以テ期限ノ起始又ハ再始
ハ起ルモノトス
裁判所編制法第百一条ニ裁判所ノ休暇ハ
七月十五日ニ始マリ九月十五日ニ終ルモノ

トストアル此行文ニ付キ乃チ九月十五日ハ
休暇ニ属スヘキ乎將々然ラサル乎ノ疑問ア
リ然ルニ根原ノ草按ニハ八月三十一日ニ終
ルトアリテ而テ之ニ依レハ三十一日ハ月末
ノ日ニシテ何人モ事務ヲ再々執リ初ムヘカ
ラサルヲ以テ此應ニ休暇中ニ算入スヘキハ
必セリ然ルニ国議院委員ハ休暇ヲニケ月間
ニ延長セシムル為メ現今ノ如ク修正シタル
ナリ然リ而テ七月十五日ノ當日ヲ休暇中ノ
日ニ算入スルハ七八兩月ハ相継キテ三十
一日アルヲ以テ通計六十三日ノ日子アルヘ
レ是レ帝国高等高等裁判院ノ休暇日子ナル

ナリ

若し裁判所休暇ハ七月十五日ヲ以テ始リ二
ケ月間トスト明ホシアルモノトセハ即チ本
法第二百条ニ依リ九月十五日ハ休暇中ノ日
子ニ属セシムヘキナリ故ニ原按ノ行文並ニ
法律ノ目的ヲ斟酌シテ以テ裁判所編制法第
二百一条ノ趣義ハ九月十五日ヲモ休暇ニ算
入スルモノト解釈シテ可ナリ

第五解猶豫期限

其数ニ付テハ本法第一百九十
八条第一解〔四〕又其資類ニ付テハ同ク〔五〕ヲ参
看スヘシ此他尚ホ参照スヘキハ本法第二百
二条第一項及ヒ本法第二百十一条乃至第二

百十三条ナリトス

本条第三項〔此項ハ特ニ一条ト為スモ可ナラ
シ予〕ハ其重要ナルノ頗ル大ナリト云フヘシ
乃チ或ル期限ニシテ其内部ノ性質ニシテ不
変確定ノモノナリト至ハ本法ニ於テ明言セ
サル限りハ之ヲ猶豫期限ト為サ、ルヲ以テ
ナリ例ヘハ本法第六百五条ノ如キ上訴ノ期
限ヲ指定スル所ナレハ猶豫期限ト明示シテ
イサルカ故ニ不変ノ猶豫期限ニハ之アラサ
ルナリ

之ニ反シテ又他ノ不服訴訟〔本法第八百三十
五条第八百七十条参看〕ニ付テハ法律上期限

ヲ猶豫期限ナリト説明セリ
必^意竟此律義ハ爰ニ其平均ヲ挙テ定メタルモ
ノニレテ到底必ス然リト云フニ冰ラサルヘ
キナリ

第二百二条 [期限ノ伸縮ニ関スルノ条]

原被告ハ猶豫期限ノ外ノ期限ハ合意シテ之ヲ
伸シ又ハ縮ルヲ得
裁判官ノ定ムヘキ期限及ヒ法律上ノ期限ハ原
被告ノ申立ニ因リ其顯著ナル事由ノ信用スヘ
キ時ニ限り之ヲ縮メ又ハ伸スヲ得但法律上
ノ期限ニ付テハ特ニ定ムル場合ニ限ル可シ

之ヲ伸ハシタル場合ニ於テハ其新期限ハ前期
限ノ経過アリ起算スルモノトス但各場合ニ付
テ特ニ定メタル時ハ此限ニ在ラス

第二百三条 [同上]

期限ヲ伸シ又ハ縮ムルノ請願ニ付テハ豫メ口
頭并審ヲ要セスレテ判定スルヲ得
期限ヲ縮メ又ハ再ヒ伸ハスニ付テハ豫メ對手
人ヲ尋問シタル後之ヲ許可スルヲ得ルモノ
トス
期限ヲ伸ハスニ付テノ請願ヲ却下スル判定ニ
付シテハ上訴ヲ為スヲ許サス

第一解第二百二条第二百三条及レ第二百五条
ニ對スル理由ノ説明 盖訴訟上ノ期限ヲ伸
ハシ若クハ縮メ又ハ期日ノ休止ニ関シテ通
則上原被告ノ意思ヲ制限スルヲハ必要ト為
サ・ルノミナラス又便宜ナリト云フヘカラ
ス是ヲ以テ本条第百二条及レ第百三条ニ於
テ原被告ノ合意ニ委スルノ主義ニ於テ規定
シタリ〔本法第二百二十八条モ亦參着スヘシ〕
然レ氏是ニ付テハ亦〔本法第四百六十一条ニ
於ケル治安裁判所ノ審理手續ハ之ヲ除キ〕原
被告期日ノ休止ニ付キ合意スルト虽モ更ニ
期日ヲ指定スヘキ日ヲ自定シ得スレテ只期

日延期ノ契約ニ止メ其新时期日ハ裁判所又ハ
裁判長ノ特権内ニテ指定スヘキノ趣義ナル
ハ固ト喋クヲ要セスレテ明カナリ
而テ猶豫期限ナルモノニ付テ原被告ノ合意
ヲ許サバル主義ハ素ト旧來慣行ノ原則ヲシ
テ而カモ更クノ新定法制ニ於テ之ヲ採用シ
アリテ〔在ルテムベルグ国訴訟法第二百六十
四条バイルン国同上第二百十二条バゲン国
全上第百四條字漏生国草按第百二十條
ハノール国草按第百八十八條ヘッセン国草
按第百六十六條北部独乙聯邦第百二十
八條澳私太利国草按第百四十七條參着〕且之

法第百五十二條ハ之ニ反レ此猶豫期限ヲモ
原被告ノ合意ニ因リ伸縮スルヲ得セシメ「才
ルゲンボルグ」國訴訟法第九十六條モ亦然ル
ナリ且其濫用ノ弊ヲ防止スル為メ特ニ之カ
規則「第三項」ヲ設ケアリ然レハ其規則ハ實際
上適切ナラスト云フ
猶豫期限ヲ經過セシメタルニ對シ原期回復
ヲ請願スル期限ニモ亦此猶豫期限ニ於ケル
ト同一ノ制限ヲ為シアルナリ「本法第二百十
二條第二項參看」

第二解制定ノ沿革

國議院委員會ニ於テ合意
上ノ期限延期ノ制ハ之ヲ猶豫期限ニモ亦及
ホスヘキ乎ノ問題ニ付キ頗ル珍奇ナル議論
アリタリシモ遂ニ本文第二百二條第一項ヲ
採テ之ヲ取消カシメタリ然レハ又理由説明
ノ趣旨外ニ涉リ更ニ説明ヲ附加シテ「原告
告ハ若シ裁判ノ送達ヲ為サハル時ハ上訴期
限ノ起始ヲ伸スノ權ヲ有スヘシ然レハ合意
權ノ擴張ハ敢テ要トセサルヘシト又本文ノ
兩條ハ各草案同一ニシテ前段ノ外ニ異論ナ
ク採用セラレケリ

第三解猶豫期限

此不変ノ猶豫期限ニ付テハ

上ノ第二百一条第五解ヲ参着スヘシ
第四解合意及ヒ申立 原告合意ヲ為スニ付
テハ別ニ程式ニ拠ルヲ要セス乃チ本法第三
十八条ニ准拠シ明諾又ハ黙諾ヲ以テ之ヲ為
シ得ルナリ〔本法第三十八条第三十九条ニ対
スル第六解参着〕又他ノ法律上期限ニシテ猶
豫期限タルヘキモノニ付テハ亦原告ノ合
意ヲ許サ、ルカ如シ〔本法第二百一条第二
百十二条ニ對スル第六解参着〕然リ而テ期限
ヲ伸シ又ハ縮ムルニ付テハ本法第二百六条
ニ反シテ必ス原告ノ申立アルヲ要トス但
本法第二百四條第二項ノ場合ハ又例外ナリ

第五解法律上ノ期限及ヒ裁判官ノ定ムヘキ期
限〔本法第二百四條第九十八条第一解第二
解参着〕其顯著ナル理由ヲ証明スルハ本法
第二百六十六条ニ從テ之ヲ為スヘキナリ
盖法律上ノ期限ハ即チ猶豫期限モ亦〔本法第
百九十八条第一解〔五〕参着〕申立ニ因リ特定ノ
場合ニ從テ裁判官ニ於テ之ヲ伸縮シ得ルナ
リ而テ本法第二百四條第二項ハ只原告ノ
申立ヲ要セスシテ延期スルノミヲ明示シ
而テ猶豫期限ノ減縮ニ付テハ更ニ規則スル
所ヲ見ス然リト虽モ猶豫期限ニ付テハ原期
回復ヲ許シアルナリ〔本法第二百一条乃至

第二百十三條參看

第六解新期限ノ計筈

本文第二百二條第三項

ノ規則ハ稍々高法第三百三十三條ニ類似ス
然レモ本文ハ命令規則ニシテ且別ニ特定シ
得ルコトヲ許ルセリ

法律ハ新期限ノ長短ニ付テ更ニ明示セス然
レモ裁判官其次議ニ之ヲ定メテ明示スルヲ
例トス若シ之ヲ明示セス又ハ原被告第二百
二條第一項新期限ノ長短ニ付キ定メサル時
疑ヒアル場合ニハ原ノ期限ト同時限ナリト
看做スヘキナリ

此法律ニ於テ例ヘハ本法第二百十二條第三
項ニ於ケル如ク家長期ノ期限ヲ示定シアラ
サル限りハ裁判官原被告共ニ期限ノ延期ニ
付キ一定ノ程度ヲ要スルノ制限ヲ被ラサル
ナリ

第七解審理手續

此手續ニ付テハ即チ本文第

二百三條ヲ以テ規定ス而テ此第一項第二項
ハ即チ第二項ニ於テ要トスル對手人ノ審理
ヲ書面ヲ以テ為レ得ルノ趣義ニ至テハ同一
ノモノト做スヘキナリ短縮願ヲ作ケ及ヒ一
回ノ延期ヲ許可スルハ對手人ヲ審理スルコ
トヲ裁判所ヨリ為レ得
却下ノ判定ニ對シ上訴ヲ許サ、ルハ

第二百

三条第三項〔控訴〕本法第四百七十三條ヲモ許
サ、ルナリ而テ期限短縮ノ願ヲ却下セラレ
タルニ付テハ本法第五百三十條ニ准拠シ抗
告ヲ為スヲ得之ニ反シ期限ノ短縮又ハ延期
ヲ許可スルニ付テハ控訴ニ限り為スヲ許ス

〔本法第四百七十三條參看〕

〔第八解費用〕費用ニ付テハ本法第九十條及
第九十條乃至第九十一條第一解乃至第三解
ヲ參看スヘシ

第二百四條〔呼出期限答弁期限送達期限ニ
関スルノ條〕

答辯期限呼出期限及ヒ準備局面ノ送達ノ為メ
定メタル期限ハ申立ニ因リ之ヲ縮ムルヲ得
答辯期限及ヒ呼出期限ヲ縮ムルハ之カ為メ各
面ヲ以テ口頭對審ノ準備ヲ為スヲ得サル場
合トモ之ヲ禁セサルモトモ
裁判長ハ期限ヲ指定スルノ際豫メ對手人及ヒ
他ノ關係人ヲ尋問スルヲナクシテ短縮ヲ命ス
ルヲ得此命令ハ謄本ヲ以テ關係人ニ通示ス
可シ

〔第一解理由ノ説明〕抑本條ノ規則ハハノ一ヲ

ル国草按第九十條及ヒ北部独乙聯邦草按
第二百三十一條ニ倣フタルモノニシテ而カ

モ審判手續ヲ円滑ナラシムルノ意アリ即チ
或ル事件ノ種類ニ從テ迅速ナル略式審理手
續ヲ要スヘキモノニ付テハ固トヨリ論ナク
又証書及ヒ為換ニ關スル訴件ニ於ケル略式
訴件ニ付テハ自ラ其為換訴訟〔水法第五百六
十七條第二項參看〕ニ對スル短期ノ答弁期限
ノミヲ指定スル了ニ限局レ得セシメタル所
ナリ

又疑惑ヲ避ル為メ特ニ水條第二項ニ於テ答
弁及ヒ呼出ノ期限ニ付キ之ヲ縮ムル為メ書
面ヲ以テ口頭對審ノ準備ヲ為シ得サルヘキ
件トモ尚ホ之ヲ短縮スルノ命令ヲ為ス了

ヲ明示シタリ抑事件ノ迅速ナル審理裁判ヲ
要ムルニ反對シテ存スルモノハ即チ各面ヲ
以テ口頭對審ノ準備ヲ為スノ要求是レナリ
乃チ書面ヲ以テ準備スルハ呼出ノ送達ト期
日トノ間ニ存スル時間ヲ以テ為シ能ハサル
ノ理由ヲ以テ短縮ノ請願ヲ却下セシメサル
ナリ然レモ此第二項ニ於テハ又若シ答辯期
限又ハ呼出期限ノ指定短キニ過キ實ニ呼出
ヲ受タル者ヲシテ弁護ノ準備ニ要用ナル時
間タモ得セシメサル了ノ之アル場合ニ於テ
其口頭對審ヲ延期スル了ハ敢テ禁止シアラ
ザルナリ

第二解制定ノ沿革 本法第二項ハ一千八百七十
二年ノ第一原案ニ於テ初ノ起按セラレタル
所ニシテ乃ケ此外ハ各草按皆同一ナリ又国
議院委員會ニ於テハ本法第百九十八条第二
解ニ述ヘタル論議ノ外ハ別ニ異議ナカリシ
第三解々叙 本条ヲ解釈スルニ付テハ本法第
百九十八条第一解第二解ニ就テ参考スヘシ
然リ而テ本条ニ於テ本法第二百二条第二百
三条ノ規則ニ對シ簡易ナルヘキハ即チ短縮
スヘキ原由ヲ証明セシメ及ヒ對手人ヲ當ニ
尋問スヘキ了ヲ要トセサル所ニ在ルナリ又
本条第三項ニ於テ裁判長ニ許ルシアル權利

ハ其期日ヲ指定スル場合ニ限り裁判所モ亦
之ヲ有スヘキハ固トヨリ言ヲ俟タス
本条ノ末段ニ規定シアル命令ノ謄本ヲ以テ
通示スルノ手續ヲ為サ、ル時ハ其呼出ヲ受
ケタル者ニ向テハ缺席ノ裁判ヲ為スヘキ要
件ヲ具備セサルモノト做スナリ

第二百五条 期日ノ休止及ヒ変更ニ関スル
ノ条

原告ハ期日ヲ休止スル了ニ付キ合意スル了
ヲ得

期日変更ノ請願ニ付テハ期限ヲ伸ハスニ関ス

ル規則ヲ適用ス

第二百六条 [全上]

期日ノ變更對審ノ延期及ヒ對審繼續ノ為メニ
スル期日ノ指定ハ職權ヲ以テモ亦之ヲ為ス
ヲ得

第一解理由ノ説明及ヒ制定ノ沿革 理由説明

ハ本法第二百二条第二百三条ノ第一解ニ舉
述シタリ而テ各章按其行文ヲ異ニスルモ趣
義ハ皆同一ナリ又國議院委員會ニ於テ黙諾
上ノ期日休止ハ原被告兩造共ニ期日ニ出廷
セサル場合ニ方テ許スヘシトノ動議アリシ

モ自ラ取消シタリ此他更ニ論議ナカリシ

第二解合意 此合意ノ義ニ付テハ本法第二百

二条第二百三条ノ第四解ニ詳述セリ蓋之ニ
付テハ彼自ラ取消シタル動議〔上ノ第一解參
看〕ニ舉述スル場合ヲ以テ口頭對審ノ期日ニ
原被告兩造ノ不參シテ本法第二百二十八条
第二項ニ依リ同一ナル効力ヲ有スヘキハニ
限り期日變更ノ合意ト同視得ルナリ蓋對審
ヲ為ササルト不參トハ同一ノ効力ナルナリ

〔本法第二百九十八条參看〕

又原被告明諾スルハ裁判所職權ヲ以テ指
定シタル期日ニシテ且原被告別ニ對質スヘ

キ丁ナキ場合ニ限リ証拠呈供ノ為メノ期日
ヲモ亦休止スル丁ヲ得
期日ニ付テハ本法第百九十三條乃至第百九
十七條ヲ参着スヘシ

第三解請願 本法第百五條ニ規定シテ本法
第百二條乃至第百四條ノ規則ヲ適用セ
シムル所ハ即チ其著シキ理由ヲ証明スヘキ
丁第百二條第二項及ヒ期日ノ変更ヲ伸縮
シ又ハ承諾シ又ハ拒否セラルヘキニ付テ対
手人ノ尋問ヲ要スヘキト否及ヒ上訴ノ攻撃
ヲ許ルスヘキト否**第百三條**トニ付キ適用
スルニ限ルモノトス

又本文第百五條第二項ハ只変更ニ付テノ
ニ明示シテ反テ延期又ハ継続期限ニ付テ更
ニ明示スル所ナレトモ此ニ期限ニ付テモ
請願ニ得ルハ言ヲ俟タズ但請願ニ付テノ通
例ノ原則ニ従ハサルヘカラサルノミ

第四解變更及ヒ延期及ヒ継続期限 此第百
五條第百六條ニ掲ル術語ノ意義ニ付テハ
本法第百九十一條第百九十一條ニ對スル第三解ヲ
参着シ又本文第百六條ノ制限ニ関シテハ
本法第百三條ヲ参照スヘシ

第五解費用 費用ニ付テハ本法第百九十一條及ヒ
第百九十一條ニ對スル第一解乃至第三解ヲ参

照スヘシ

第二百七条 [受命又ハ受託ノ裁判官ノ職權

ニ関スルノ条]

此節ニ於テ裁判所及ヒ裁判長ニ付與シタル權
限ハ受命裁判官又ハ受託裁判官其指定スヘキ
期日及ヒ期限ニ関シ之ヲ有ス

[理由ノ説明及ヒ制定ノ沿革及ヒ解釈] 理由説

明ニ於テ本条ニ付テ別ニ解説セズ而テ各章
按皆同一ナリ持リ北部独乙聯邦草案按第二百
三十三條ニ於テ只其第二百二十九條乃至第
二百三十二條[本法ノ第二百二條乃至第二百

六條ニ當ル]ニ付テノミ權利ヲ委スルナリ本
法ニ於テハ此節ニ舉ケル各場合例ヘハ本法
第百九十三條第二項ヲモ概括スルノ趣義ナ
リ

国議院ニ於テ異議ナリ採用セラレタリ

受命裁判官受託裁判官ナル語ニ付テハ本法
第百五十一条第一解ヲ参看スヘシ又本条ヲ
應用スヘキ場合ハ即ケ例ヘハ本法第三百十
三条第三百二十條第三百二十七條第二項第
三百四十條第三百七十條ニ於テ之ヲ見ルヘ

第四節 怠慢ノ結果及ヒ原期回復

第二百八条 〔怠慢ノ一般ノ結果ニ関スルノ条〕

訴訟上行為ノ怠慢ハ原被告ニ於テ其為ス可キ訴訟上行為ノ停止セラル、一般ノ結果ヲ生スルモノトス

第一解此第四節ニ對スル理由ノ説明 理由説

明ヲ抄センニ即チ曰訴訟ノ目的ヲ達セシムルニハ即チ法律ニ於テ原被告カ訴訟上ノ行為ヲ放弛シ或ハ訴訟上行為ノ為メ定メアル時期ヲ格遵セサル如キ時ハ之ニ因リ損害ヲ

受クヘシト規定スルヲ要トス而テ此損害ヲ目シテ怠慢ノ結果其沈義ニ於テトハ称スルナリ抑原被告ニ於テ命令上若クハ類推上ノ規定ニ係ル行為又ハ對審若クハ其親ラ為スヘキ對審中ノ行為ノ怠慢ニ因テ此怠慢ノ結果ヲ發生スルノミナラス尚ホ且其行為ノ不完全ニ因テ亦生スヘキモノトス蓋新定ノ各独乙訴訟法制ハ右ノ趣義ニ基ツキ訴訟上行為ヲ概シテ為スナリ若クハ適當ノ時期ニ於テ為サレハ原被告ハ又親ラ之ヲ為スヲ欲セサリシモノト視認シ一般ノ怠慢ノ結果ニ処ナレムルナリ乃チ原被告訴訟上^行為ノ怠慢

ニ因リ其訴權ヲ禁停セラルハ自ラ之ニ至リ
又ハ法律ノ力ニ因テ之ニ至ルヲ例トシ特別
ノ場合ニハ亦對手人ノ申立ニ因テ然ルニ至
ルヘキナリ

抑此禁停タルヤ尤モ理ニ適シ且之ヲ必要ト
スヘキカ如ク然リトハ虽モ還テ實際ニ於テ
嚴肅ニ之ヲ施行シテ更ニ遺脱スル丁ナカラ
シメント為スハ則チ頻繁ナル場合中ニハ
遂ニ訴訟ノ成績ハ適偶然ノ因果タルニ過キ
サラレメ且其迅速ナル結局ハ現行邦法ノ費
用ニ割スルニ至ラシムルノ惧ナキニ之アラ
サルヘシ是ニ於テ予即チ立法者ハ必ス恒ニ

訴訟ノ進行ヲ確保シツト却テ怠慢ノ原告
ニ被害スル所ナカラレメント努トメテ善ク
其方法ヲ按定工夫スルノ必要ヲ免カレ難キ
ナリ

此重大ナル課程ヲ果サント試ント為スニ付
テ二個ノ著シキ反對主義ハ相並立スルヲ見
ル
乃チ旧時ニ在テハ怠慢ヲ為スニ方テハ緩ニ
其之ヲ恢復セントスルニ對シテハ酷ナリキ
現今ニ至テハ全ク之ニ反對スルヲ以テ立法
上政策ノ幹軸トハ為スナリ
蓋本法ニテ其怠慢懲戒制ニ付テハ能ク其旨

キヲ得テ即ケ大要ハノフリール国法制ト相齊
キ北部独乙聯邦草梅ニ採取セル所ニ模倣
テ而カモ大方殊ニ代言者流ノ喝采ヲ受クル
所ノ嚴ニシテ苛酷ニ失スル丁ナク緩ナルモ
訴訟遲滞ニ陥ラサル中庸ノ主義ニ拠リタリ
今其原則トスル所ヲ約示セハ即ケ

第一凡期日及ニ期限ハ結局的ノ性質ヲ有ス
即ケ職權ヲ以テ指定スルモノ〔本法第三百
十六條以下第五百七十七條第五百九十八
條第六百十二條參看〕ヲ除キ既ニ第一回ノ
呼出ニ於テ缺席ノ裁判ヲ為シ得ヘキモノ
トス

第二怠慢ノ成績ニ付テ懲戒スルノ必要ハ之
ヲ廢止シタリ蓋是レ殊ニ旧字漏生国法制
ニ於テ嚴肅ニ行フタル所ナリキ〔又バデ
ン国訴訟法第二百九條第二項參看〕

第三不從順ノ罪ハ其怠慢ニ因ル權利損失ノ
生スルニ付キ之ヲ要トセス〔本法第二百九
條參看〕而テ特ニ律文ニ明示シテ之ヲ必要
スル場合ニ付テハ復タ不從順ノ罪ニ付テ
ノ審理ヲ結了スルマテハ怠慢ヲ追補スル
ヲ許スナリ

第四此外法律ヲ以テ特ニ之ヲ許ス場合ニ限
リテ怠慢ノ追補ニ因リ其怠慢ノ結果ヲ廢

停シ又ハ權利自護ノ方法ヲ以テ亦之ヲ廢
停セシムルヲ許ルス而テ期限經過及ヒ對
審中ノ行為不完全ニ對スル裁判更正ハ之
ヲ廢止スルノ原則ヲ採用シタリ

又此法律ニ於テ怠慢ノ結果ヲ廢停セシムル
ハ即チ

[甲]一般ニハ對審期日ノ缺席及ヒ之ニ因テ興
ヘタル缺席裁判ニ對シテハ其本按ナルト
附帶訴訟〔本法第三百十二條第二項參看〕
ルトヲ向ハス故障申立ニ依リ

[乙]特別ニハ裁判更正ニ類似スル理由ニ係ル
審理中ノ不完全ナル行為ニ對シ〔本法第四

十四條第三項第二百四十七條第三項第三
百十九條第三百三十二條第三百三十九條
第三百四十六條第三百九十八條第四百九
十條第四百六十九條參看〕而テ其未タ終審
ノ本按判決ヲ為サ、ル際ハ怠慢追補ニ依
リ〔本法第二百九條第一百九十七條第二項第
二百五十一條第二百五十二條參看〕

[丙]猶豫期限ノ怠慢ニ對シテハ嚴格ナル裁判
更正訴願ノ方法ニ依テ

以テ為スニ在リトス
右ノ第一乃至第三ニ舉ル原則ノ性質ヲ論ス
レハ通則ニ屬ス故ニ本條及ヒ次キノ第九百

九条ニ以テ之ヲ掲ルハ本節ノ編次上能ク妥
当ノ位地ニ措キタリト云フヘシ〔バイルン国
訴訟法第二百十五條オルデンボルグ国第九
十八條第九十九條北部独乙聯邦章按第二百
八十四條以下參看又本法ニ於テハ急慢ノ結
果ノ廢停ヲ許スヘキモノニ付テハ乃チ本法
中ノ各條ニ取テ右第四ニ摘要シ且ハノ一フ
ル国訴訟法第百五十五條ニ於テハ援例トシ
テ明示スル如ク亦其通則ヲ明定ス蓋缺席裁
判及ヒ故障申立ハ全ク本案審理ニ附從セシ
メテ審判スルヲ便宜トハ本法第二百九十五
條以下參看急慢追補ニ因テ急慢結果ヲ廢停

スル場合ニ付テモ亦同シ本法第四十四條第
三項第二百四十七條第三百十九條第三百三
十二條第三百三十九條第三百四十六條第三
百九十八條第四百九十九條第八百六十九條等
參看然リ而テ猶豫期限急慢ニ對スル原期回
復ノ規則〔本法第二百十一條以下〕ヲ此審理ノ
總則部門中ニ編入シタルハ其當ヲ得タル編
次ニシテ且理由ニ適シアルナリ云々
是ニ付テ梗概ヲ知ラント欲セハ本昏凡例ニ
載スル本法ニ對スル一般ノ理由説明又國議
院委員會議ノ実況及ヒ原按ノ僅々ナル修正
ニ関シテモ亦本昏凡例ヲ參看スヘシ

夫レ此法律ハ一ノ整頓シタル家屋ニ同シ後
テ各人應分ノカヲ尽シテ是ニ居住スルニ便
利ナラシメント試ムルヲ努力セサルヘカラサ
ルナリ

〔第二解本条ニ對スル理由説明〕 訴訟上行為ノ

怠慢ノ法律上ノ結果ハ半ハ普通ニシテ半ハ
特別ノモノトノ二様アルナリ
而テ本条ハ只ニ普通ノモノニ付テ規定スル
所ニテ即チ原被告ノ一方其指定セラレタル
期限ニ関スル各行為又ハ期日ノ怠慢シ或ハ
口頭對審中ノ訴訟上行為ノ全部若クハ局部
ヲ為サ、ル時ハ相当ノ結果ヲ生スヘキヲ

概言シタルモノトノ又怠慢ト拒否トヲ全ク
同等ノモノト看做シテ規定セリ抑此結果タ
ルヤ原被告ニ於テ〔怠慢ニ因テ生シタル費用
并償〕水法第八十八條第二百十六條第三百九
十九條ヲ為スノ外〕談当期限内若クハ期日ニ
於テ當ニ為スヘキ訴訟上行為ト共ニ停止セ
ラレ又ハ停止セラレ得ル所ニ成立スヘシト
ノ規定ハ既ニ独乙国ノ法律ニ於テ曾テ行ハ
レタルモノナリ〔テ〕ルテムベルグ国訴訟法第
二百七十条以下バイルン国全上第百二十五
條ハノール国全上第百五十五條オルテム
ボルグ国全上第九十八條グラウンシェヴァイヒ

国全上第百二十条バデン国全上第二百八条
第百三十一条ハノール国草按第百三十
三条第百九十四条ヘッセル国草按第百七十
一条北部独乙聯邦草按第二百八十四条サウ
セニ国草按第五百三十七条漢私太利国草按
第二百四条参看

怠慢ノ特別ノ結果ニ付テハ法律ニ於テ特ニ
明挙シアルヘシ蓋其種類ノ異同アルヤ猶ホ
為スヘキ行為ノ事件及ヒ目的ニ於テ千差万
般ナルカ如ク然ルナリ而テ其生スルヤ或ハ
自認審定ノ豫審本法第百二十九条第百九
十六条若クハ証昏認諾ノ豫審本法第百九

十六条第百四十四条若クハ供述自認ノ豫審本
法第八十一条ニ於テシ或ハ詐權棄却本法第
二百九十五条若クハ宣誓拒否本法第百十
四条第百二十九条第百三十一条ノ認定ニ
於テスル等ニ就テ之ヲ見ルヘシ

第三解制定ノ沿革及ヒ解叙 北部独乙聯邦草
按第百八十四条ニ於テハ只ニ怠慢スル期
限及ヒ期日ニ付テノ規定シアルナリ此他
ノ草按ハ皆同一ナリ国議院委員會ハ異議ナ
ク採用シタリ
而テ此解叙ニ付テハ上ノ第一解(一)ニ述フル
所ヲ参看セシムヘキナリ乃チ凡ヘテ期限及

と呼出ハ己ニ第一回ノ指定ニ於テ終結ノ性質ヲ有ス

此如キ嚴格ナル主義ノ結果ニ関シテハ宜ク本法第百二十九条第四解ヲ参看スヘシ又本条及ヒ第二百九条ノ急嚴ハ即チ渡々訴訟ノ多数ハ概テ代言人代理ノ制裁ニ属シアル所〔本法第七十四条〕及ヒ代言人訴訟ニ於テハ其本人ニ為ス呼出ニ必ス代言人任定ノ要求ヲ明示セサルヘカラサル所〔本法第百九十二条〕ニ依テ之ヲ緩柔ナラシムルヲ得ヘシ然レ治安裁判所ノ審理手續ニ於テハ實ニ此新定ノ嚴格ナル主義ニ付キ衆庶ヲシテ通曉

セシメンニハ相当ノ法學研究ヲ要セシムヘキナリ

第二百九条 〔怠慢ト為スノ要件及ヒ怠慢ノ

追補ニ関スルノ条〕

怠慢ノ法律上結果ノ要因ハ之ヲ為スヲ要セス此結果ハ此法律ニ於テ權利損失ヲ被ムラシムヘキノ請願ヲ要ト為サ、ル場合ニ限り自ら発生スルモノトス

此請願ヲ要トセサル場合ニ於テ請願ヲ申立テス又ハ其申立ニ付テノ口頭對審ヲ終結セサル間ハ怠慢シタル訴訟上行為ヲ追補スルヲ得

第一解理由ノ説明

怠慢ニ因ル一般又ハ特別

ノ權利損失ニ付テハ西ツナカラ豫メ要迫責
戒ヲ要セサルナリハノ一フル国訴訟法第百
五十五條バイルン國全上第百十五條ケル
テムベルグ國全上第百七十七條第百七十
二條オルデンボルグ國全上第九十九條ハノ
一フル國草按第百九十五條北部独乙聯邦草
按第百八十五條澳斯太利國草按第百五
條參看蓋此原則タルヤ一ニハ訴訟上行為ハ
原被告親ラ之ヲ為スノ主義ノ結果トシテ餘
義ナク之ヲ發生シ且總ヘテノ期限及ヒ期日
ハ終結的ノ性質ナリト為セルニ因ルノ成績

ナルカ如キノミナラス一ニハ又此原則ハ彼
ノ要迫責戒ヲ要トスル法制ニ固有スル所ノ
要迫ヲ適當ニ為シ且豫審訴訟ヲ為スニ關ス
ル争訟ノ類ヲ除去セシメテ實際ニ著シキ効
用ヲ為スナリ加之亦是レ本法ニ採テ以テ批
ル所ノ殊ニ明言ヲ俟タサル審理上ノ大原則
ニ因レル効トシテ當然ナルヘキナリ夫レ裁
判所ハ其面前ニ於テ對質シタル争点ニ付テ
之ヲ裁判スルノ職分ナリ而テ其争点ヲ論究
シ説明スルハ訴訟人ノ本分トス然ルニ法律
ハ裁判所ニハ非ラス原被告ニ向テ如何シナ
ル語ヲ規定シテ示シアルナリ何按其事如何

何ニト審問スルノ言義ニ因テ殊ニ法律ノ命令ニ遵
ハサルハ如何ニノ權利損失ヲ速ネク乎ニ
付テ明言シアリ乃チ法律ヲ以テ要迫シアリ
テ對手人ノ申立ヲ要セサル權利損失ハ敢テ
之ヲ特ニ要メナルモ〔缺席裁判ハ別ナリ〕又裁
判官ノ特別ノ命令ナリモ自ラ法律ノ力ニ依
テ生スル各条規ノ理由モ亦此裏ニ存ス
前項ノ二個ノ原則ノ外尚ホ例外ノ規則アリ
然レモ甚々僅少ナリ乃チ怠慢ノ權利損失ヲ
告示シテ要迫スルハ并償命令ニ於テ之ヲ要
ス〔本法第六百三十二条參看〕公然ノ揭示手續
〔本法第八百二十四条三〕第八百四十一条ニ於

テモ亦之ヲ要セリ盖此例外規則ハ其手續ノ
特別ナル性質ノモナルニ因テ当ニ然ルヘ
キモノナリ而テ証人及ヒ鑑定人ヲ示定スヘ
キ豫審ハ此例外中ニ算入スヘカラス〔本法第
三百四十二条第三百六十七条參看〕又怠慢ノ
懲戒ヲ被ムラシメントノ請願不從順ノ懲戒
ヲ要スト定メタル場合ノ數ハ僅少ナラサル
ナリ其先ツ爰ニ纂スセキモノハ即チ本法ニ
於テ採用シタル缺席審理ノ構成及ヒ故障申
立ノ制ト相連繫スル所ノ期日不參ニ係ル缺
席裁判ノ廣大ナル部分是レナリトス〔本法第
二百九十五条以下第三百十二条第四百十四

条第二百十七條第二百十八條第二百二十三
條第二項第三百十八條第四百三十條第五百
二十九條第五百六十三條第五百七十八條第
六百十一條第七百六十七條參看此外分散法
第百三十條ノ場合モ亦之ニ屬シ得ヘシ
蓋不從順ノ懲罰ヲ必要ト為スト共ニ自又其
請願ノ申立アルマテハ怠慢ノ補充ヲ許可セ
サルヘカラサルノ要アルナリ〔前項ニ列載セ
ル各條ヲ參看スヘシ〕然ルニ本法ニ於テハ怠
慢ノ追補ヲ許スハ更ニ其請願ニ付テ審理ヲ
終ルマテト定メアリ〔本法第百二十七條第
四項第六百三十四條第八百二十八條參看〕是レ

即チ爰ニ專ラ論スル所ノ期日ノ怠慢ニ照シ
本法第百九十七條第二項ニ准スルノ止ヲ得
サルニ基テ而カモ自ラ審理ノ煩雜ト費用ノ
増加ヲ防止ラル所ノ規定ナリ

第二解制定ノ沿革 北部独乙聯邦草案第
二百八十五條第二百八十六條ハ其行文ニ於テ異
ナル所アリ其他ノ草案ハ皆相同シ又國議院
委員會ハ異議ナク採用セリ

第三解怠慢ノ法律上結果 此法律上結果ハ即
チ本法第百八條ニ於テル一般ノ結果トス
是故ニ只各行為ニ付テ法律上明定スルモノ
ニ限ラサルナリ但特格ナル結果ノ法律ノ力

ニ依テ要迫シアルトノ趣義ノ本法第二百
八条第一解参着盖本法第二百八条ニ適合セ
ス又特ニ法律ヲ以テ定メサル所ノ権利損失
ハ之ヲ允許セサルナルヘシ乃チ法律ナケレ
ハ即チ衆ナシトノ格言ハ爰ニモ適用スルヲ
得テ即チ類推ヲ禁制スルナリ然レモバデン
国訴訟法第二百八条ニ依レハ之ニ異ナリ但
其第百九条ヲ以テ裁判官ヨリ要迫ノ告示及
之原被告ヨリノ怠慢懲戒ノ請願ヲ要シアル
ナリ

然リ而テ此結果タルヤ敢テ裁判官例ニ從ヒ
特更ニ命令シテ言渡スルナクシテ自ラ生ス
ルナリ上ノ第一解第一項参着特ニ例外ノ場
合ハ缺席裁判例ヘハ本法第百五条ニ於ケル
認定モ亦然リ及ヒ不從順ナル証人鑑定人ニ
對スル罰ノ二トス

第四解契約上ノ権利損失 盖契約上ノ権利損
失ハ仲裁々判役ノ手継本法第百六十条第
二項参着ニ於テ之アリ其他ニハ更ニ之アラ
ス盖本法ニテハ僅ニ特別ノ場合ニ限り原被
告ノ合意ヲ有効ト視認スルノミニテ実ハ合
意上ノ訴訟ハ之ヲ許サハルナリ例ヘハ本法
第三十八条乃至第四十条第百二条第百
五条第百二十八条第百三十五条三第三

百六十九條第四百十五條第四百六十一條ノ
類是ナリ

第五解怠慢ノ追補 是ニ付テハ本法第二百八

條第一解〔四〕ニ準クル一般ノ理由説明ヲ参考

スヘシ而テ殊ニ切要トスヘキハ本法第四百

九十三條トス必竟口頭對審ナルモノハ一回

ヲ一全部ト看做ス〔本昏凡例參看〕了ヲ喚起ス

ルハ殊ニ爰ニ要用ナリ是故ニ例ヘハ再度對

審ヲ開ク中ハ原被告ハ凡怠慢ニ係ルモノハ

之ヲ陳述スルノ權利ヲ有ス〔本法第四百十一

條並ニ第四百十二條ニ對スル第四解參看〕又

受訴裁判所ニ於テ為ス立証手續ノ期日並ニ

証拠攻撃及ヒ立証ノ為メノ期日ニ於テモ

然ルヘキナリ此二場合ハ口頭對審ノ繼續ノ

為メノ期日ナレハナリ〔本法第三百三十五條

尚ホ本法第二百九十一條第二百九十六條第

三百三十二條ト相參照スヘシ〕独リ本法第二

百五十一條第二項第二百九十六條第二項ニ

於テハ異ナル所アリ

又本法第五百五條ニシテ本條第二項ニ特異ス

ルハ即チ怠慢ノ追補〔訴訟費用保証ヲ為ス〕

ハ書ニ怠慢懲戒ノ申立ニ付キ審理スルノ結

了ニ至ラサル間ニ止メス更ニ判決ノ宣告ヲ

為スマテハ之ヲ許レアル所ニ在リ〔本法第百

五條第二解第五解參看

第六解怠慢懲戒ノ申立 理由説明ニ曰此怠慢ニ因ル權利損失ヲ被ムラシムル申立ニ付ハ即チ他ニ明示セサル限りハ只口頭對審ニ於テ為レ昏面ヲ以テ為スヘカラサル申立ニシテ而カキ判定セラルモト理會スヘキトハ特更ニ法律ニ明示スルヲ要セス云々而テ昏面上ノ申立ヲ要スルハ本法第五條第六百三十九條ノ場合ノ如キモノニテ又之ヲ對手人ニ送達スヘキモノトス

第二百十條 過失ニ因ラサル怠慢ニ関スル

ノ條

未丁年者及ヒ之ト同視セラルヘキ者ノ資格ニ於テ保有スル權利ヲ理由トシテ怠慢ノ結果ヲ廢停スル丁ヲ得ス 過失ニ因ラサル怠慢ノ結果ヲ廢停スル丁ヲ許スト雖モ代人ノ過失ニ因ル怠慢ハ之ヲ過失ナキモノト看做サ、ル可シ

第一解理由ノ説明 怠慢ノ結果ヲ廢停スルヲ許スハ特リ本法ノ規則ニ定ムル場合ニ限ルナリ然リ而テ疑惑ナカラシムル為メ本條第一項ヲ以テ此結果ノ廢停ハ本人ニ固有セスレテ而カモ未丁年者及ヒ之ト同視スヘキ者

〔公有資産所村公舎等〕ニ與ヒラレタル權利ヲ
理由トシテ許サ、ル丁ヲ明定シアリ然レハ
民法ニ在ル未丁年者ノ其訴訟ノ怠慢ニ付キ
未丁年タルノ理由ヲ以テ回渡ヲ許ス規則ハ
適用スヘカウサルヘシ抑此規則ヲ訴訟法ノ
範圍内ニ掲出セルモ敢テ憂惧スルニ足ラス
反テ司法政策上ニ適當シテ且實際ニ施行シ
テ未タ曾テ不服ヲ唱ルヲ聞カサル所トス
又此第二項ハ即チ凡ソ代人ノ行為及ヒ不行
為ハ本人ノ行為及ヒ不行為ト看做スヘク且
本人ト代人トノ訴訟上ノ責任ニ付テハ總ヘ
テノ場合ニ於テ連帶ニ負担スルヲ例トスル

ノ主義〔本法第八十一条及ヒ其第一解第三解
參看〕ヲ採用スル所ニ基クナリ又此項ヲ明掲
スルハ蓋適切ト云フヘシ何ントナレハ當時
ニ現行セル二三ノ訴訟法ニ於テハ代理人ノ
怠慢ヲ以テ裁判更正願ノ理由ト定メアリレ
ニ大ニ濫害ヲ為シタルノ先例アリ且之ヲ裁
判更正願ノ理由ニ加ヘサルハ訴訟上審理ニ
必要ナル確保ト鞏固ナル秩序トヲ整備スル
ニ適當シアルヲ以テナリ〔ハノ一フル国訴訟
法第百五十九条ウルテムベルグ国全上第ニ
百八十三条バイルン国全上第ニ百十六条ハ
ノ一フル国草按第ニ百五条ヘツセン国草按第

二百七十三條澳私太利國草按第二百六條北
部独乙聯邦草按第二百八十八條其他各法ニ
對スル理由説明會議筆記録參着

本法ニ於テハ法律上代人〔本法第五十條第四
解參着〕ト代人トヲ區別ス蓋代人ナル語ハ法
律上代人及ヒ代人〔訴訟代人好意管理人〕ヲ包
括スルナリ〔本法第七十四條以下第八十五條
尚ホ下ノ註解參着〕

〔第二解制定ノ沿革及ヒ解釈〕 各草按皆同文ナ
リ國議院委員會ニ於テ更ニ異議ナカリシ
抑本條ノ明文ハ尙陰ヲ示レタル所ニシテ即
チ怠慢ニ關シ宥恕又ハ回復ヲ與フヘキノ陽

實ヲ舉ケス反テ之ヲ付與セサル二三ノ場合
ノミヲ示レタリ

蓋本法ハ眞實ノ回復ナルモノニ付テハ只本
法第二百十一條乃至第二百十六條ニ於テ猶
豫期限ノ經過ニ對シテノミ之ヲ規定ス而テ
故障申立ハ固トヨリ之ニ屬スヘカラス是レ
裁判更正願ノ理由アルヲ要セサルニ由ル〔本
法第三百五條參着〕又本法第二百八條第一解
第四ニ舉ケル宥恕ノ許可ハ亦純然タル回復
ノ性質ヲ有セス何ントナレハ是レニ付テハ
裁判更正願ノ手續及ヒ其判定之之アラサレ
ハナリ抑本法ニ於テ回復ナル語ハ只猶豫期

限ニ関シテノミ用フル所ニシテ例ハ本法
第四百六十二条第六百四十七条ノ基ニ於テ
スルナリ乃チ此二事ニ付テノ立法上ノ意見
彼此相合スル所トス〔本昏凡例及ヒ本法第二
百十一条並ニ第二百十二条ノ第一解參着〕
又本法第五百十四条ニ於テル裁判更正ノ訴
願ナルモノハ全ク特立ノ權利自護ノ一方法
ナリ

第三解特遇ヲ享受スル者 本法ニ於テ特曲ヲ
與フヘキ者ハ之アラズ未丁年者其他ノ訴訟
能力ナキ者ト至モ訴訟上訴訟能力〔上ノ第一
解參着〕アル者ニ比シテ回復又ハ宥恕ノ請願

ニ付キ更ニ特利ヲ享受センメサルナリ而テ
此規則タルヤ彼ノ各邦法ニ於テ是認スル民
法上ノ回復上ニハ敢テ抵觸セサルヘシ又此
規則ノ急嚴ハ復々裁判取消及ヒ裁判更正ニ
係ル再審訴願ヲ許シアル所ニ頼ラレメテ以
テ之ヲ寛和スルナリ〔本法第五百四十二条〔四〕

第四百四十三条〔四〕參着〕
第四解過失ニ因ラサル急慢 本条第二項ハ凡
ヘテ本法ニ於テ其急慢ヲ宥免スル各場合即
チ回復ノ場合〔本法第二百十一条〕並ニ單ニ之
ヲ宥恕スルノ場合〔上ノ第二解參着〕ニ涉ルヘ
キモノトス而テ此宥恕スル場合ニ付キ本条